

序説

5 Platon, *Theaitetos*, 155D, θαυμάζειν (thaumazein)

Aristoteles, *Metaphysica*, A.2, 982b11～

人間は今も、そもそもの始めも、驚くということによってこそ、哲学は始まった。

10 ー世界、自然、及び人間自身について、どのような問いを發し、それはどのように継承されていったのか、そして哲学となったのか、その問いの内容は何であるか？

ギリシア哲学の特徴 (近現代哲学との違い)

15 Überhaupt in's Grosse gerechnet, mag es vor Allem das Menschliche, Allzumenschliche, kurz die Armseligkeit der neueren Philosophen selbst gewesen sein, was am gründlichsten der Ehrfurcht vor der Philosophie Abbruch gethan und dem pöbelmännischen Instinkte die Thore aufgemacht hat. Man gestehe es sich doch ein, bis zu welchem Grade unsrer modernen Welt die ganze Art der Herakliten, Plato's, Empedokles', und wie alle diese königlichen
20 und prachtvollen Einsiedler des Geistes geheissen haben, abgeht; . . . Die Wissenschaft blüht heute und hat das gute Gewissen reichlich im Gesichte, während Das, wozu die ganze neuere Philosophie allmählich gesunken ist, dieser Rest Philosophie von heute, Misstrauen und Missmuth, wenn nicht Spott und Mitleiden gegen sich rege macht. Philosophie auf
25 "Erkenntnistheorie" reduziert, thatsächlich nicht mehr als eine schüchterne Epochistik und Enthaltensamkeitslehre. [F. Nietzsche, 1886, *Jenseits von Gut und Böse*, 204,]

今日、哲学に対する畏敬の情を、徹底的に破壊したのは、最近代の哲学者たちが、
30 人間的でありすぎたからだ。試みに、思え！ Heracleitos, Platon, Empedoclesなどの傾向が、いかに全く近代のものとなっていたかを。(中略)それに反して、science, Wissenschaft だけが發達したのに、全体としての哲学は、ますます、意気消沈している。いわゆる認識論のみに後退してしまった哲学は、消極主義の引込み思案の哲学であるにすぎない。[ニーチェ, 1886, 『善悪の彼岸』204]

35 今日の哲学は、他の学科目と並んだ、そのうちの一つのdisciplineにすぎない。このような哲学や哲学者のイメージは、Platon, Aristoteles以前の哲学や哲学者には当てはまらない。

40 初期の哲学者は、政治家であったり、技術上のことで有名であった。著作など著わさない哲学者もあった。

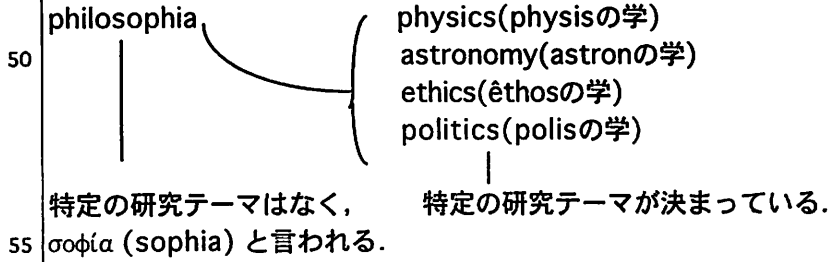
ー生きること、そのことが哲学であって、戦争や政治闘争の中から、彼等の思索が生まれてきた。

ギリシア哲学

45 1. 学としての統一性。

人間と自然と世界に関する一切の問いを含む、一つの統一体。従って、古代ギリ

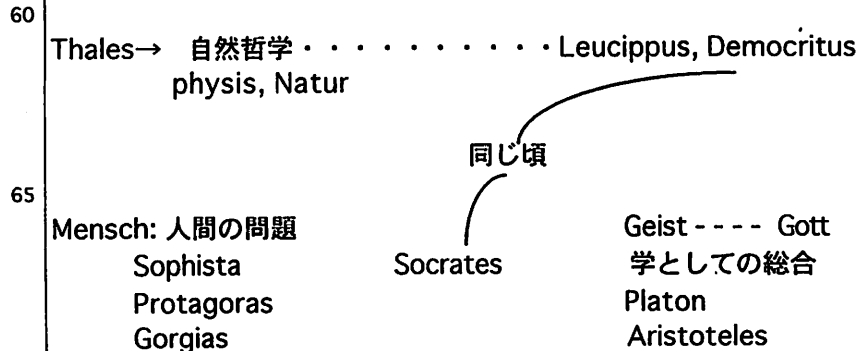
シアにおける哲学の形成の歴史は、学問全体の形成の歴史であると言える。



しかし、φιλοσοφία (philosophia)は、単なる寄せ集めではない。

2. scope (視野) の問題。

ギリシア哲学の記述のpattern (教科書的説明)



上述のような固定的・図式的な見方によって、実際に存在していた問題や事実を見失ってしまうかもしれない。

<上記に対する疑問点>

75 Thales, Socrates, Pythagoras 以外は、書物を残している。

①何故、Thalesからはじまる人々だけが、哲学者というレッテルを貼られなければならなかったか？ → 詩人、歴史家などは？ 即ち、哲学者、詩人、歴史家という区別があったのか？

②Thalesらは、自然哲学者としてのみ、哲学に寄与したのか？ 人間の問題には関心をもたなかったのか？

<手掛かり>

85 φιλοσοφία (philosophia)の一番古い用例

・ Herodotos, 『歴史』 1.30.2
Solon について用いられている。 φιλοσοφείν (philosophein)

90 Solon は、政治家、政治思想家。彼の詩は、断片としてではあるが伝えられている。それなのに、何故、Solonではなく、Thalesがはじめてのφιλόσοφοςなのか？

— Aristoteles, *Metaphysica*, A巻にThalesがはじめてに書かれているからではない

のか？

95

・ Heracleitos, Fr.35.

「φιλοσοφος(philosophos)というものは、実に多くの事柄の探究者でなければならぬ」

ibid. Fr.40.

100

「博識は、本当の意味の知(知識)を教えず、もし博識が知を教えるのだとすれば、Hesiodosにも、Pythagorasにも、Xenophanesにも、Hecataiosにもそれを教えたことであろう」

→Heracleitosは、これら4人を区別していないのだが、現代では、Hesiodosを詩人、Pythagoras, Xenophanesを哲学者の系統、Hecataiosを歴史家であると、我々は区別している。

105

ギリシアにおいては、哲学は全体的な問いである。

例えば、プラトンの著作を読めば、「人間がいかに生きるべきか」という問題が中心であることがわかるが、これは、Sophistesになって、はじめて問題になるのではなくて、むしろ、Homeros 以来の悲劇作家たちや、詩人たちにおいて、すでに問題にされていて、このtraditionがあった。

110

Homeros

Hesiodos

アルカイオス

アイスキュロス

ソポクレス

エウリピデス

叙事詩

叙情詩

Drama

succession

ギリシアにおいては、時代的に継起しているという事実がある。

ここに、内的必然性があるのではない。

115

120

Homerosは、伝説をそのまま歌う。

叙情詩は、人間について歌う・・・個の発見

悲劇は、人間の生き方を追求する

125

問題が、問題自体として扱われるようになる。

この傾向は、疑いもなく、哲学(の方向)をさし示しているのではないか？

cf. 藤澤令夫『イデアと世界』第3章

130

従って、前述のような教科書的図式による視野でのギリシア哲学の見方は、ある一つの観点からの抽象と整理の結果である、と考えられる。

—それは、アリストテレスの観点からのものである。

135

Aristoteles, *Metaphysica*, A.3, 983b6-21.

「さて、はじめに哲学した人々は、その大部分のものが、ύλη(hyle: materia)の形で、考えられる原理ἀρχή(arche: principium)を、あらゆる事物の原理であると考へた。即ち、彼等は、すべての事物が、それらから成り立っているところのもの、

140 最初にそれから生成してきて、最後にまたそれへと減んでゆくところのもの、その
 ものが事物の要素στοιχεῖα(stoicheia: elementa)であり、原理ἀρχήであると言っ
 ている・・・(中略)・・・さてしかし、そのような意味での原理の数と種類につ
 いては、すべての先行哲学者の説くところは、必ずしも同じではない。まず、この
 ような哲学の創始者であるタレースは、水をそれである、と主張している。」

145

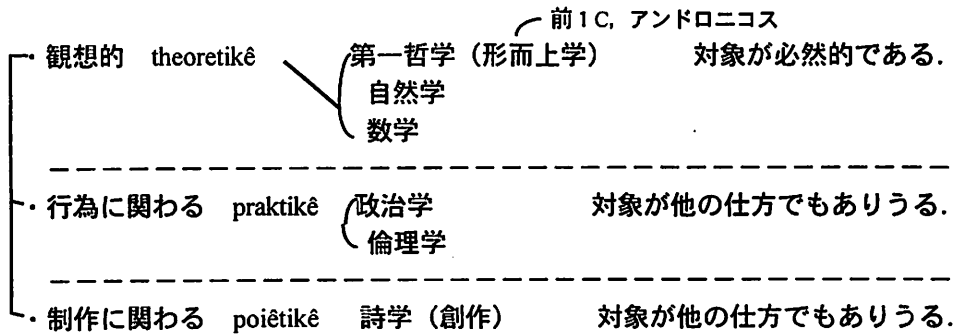
<アリストテレスの四原因説>

ὑλη (hyle: materia) ⇔ εἶδος (eidos: forma)
 κίνησις (kinesis: motus), τέλος (telos), τὸ οὐ ἕνεκα, (to hou heneka: finis)
 causa materialis ⇔ causa formalis
 150 causa movens, causa finalis

ピュタゴラス — 数 — アリストテレスによると, causa materialis

<アリストテレスの学問の領域区分>

155



160

165

アリストテレスは、このような視点から、厳格な意味における哲学の歴史を書こうとするので、自然学的な部門から説きはじめることになる。→自然科学のoriginは、
 哲学のoriginに他ならない。

人間に関する部分が抜け落ちることになる。

170

Xenophanesら自身の言葉と、アリストテレスの彼等への解釈を比べてみると、かなり違いがある。長い間、アリストテレスの権威に従って、アリストテレスの解釈をとってきたが、Theologieの面から捉え直したW.Jaegerや、H.Chernissのように、アリストテレスのVorsokratiker (ソクラテス以前の哲学者たち) 批判を再検討した研究がある。

175

たえず、タレースに帰って、研究を繰り返しているうちに、タレースを哲学者の祖とするのが、客観化されてしまい、逆に、哲学史そのものの内に、矛盾を生じるようになってきたと言える。

2012/0/10 2012
 3.史料の問題

180

中世・近世の哲学史を研究するには、まず、第一に哲学者自身の著作を読むことにあるが、古代の場合は、特に、初期の場合は、断片の形でしか残っていない。自分の手で公にするために著わした著作が、ほぼ完全に残っているのはPlatonだけである。Aristotelesの場合が、講義のための草稿に類するものしか残っていない。他の哲学者は、後の人の引用によらなければならない。それ故、Aristotelesによる

185 Vorsokratiker への言及についても、他に反証できるものがないと、そのまま受け入れられることになる。

ギリシア人は「ものを書く」ということをあまり重視していなかった。

Platon: *Phaidros* (*Phaedrus*) 274B~277A

190 「紙 (パピュロス) の上に書かれたことばは、生命をもったことばではなく、かげのようなものである」

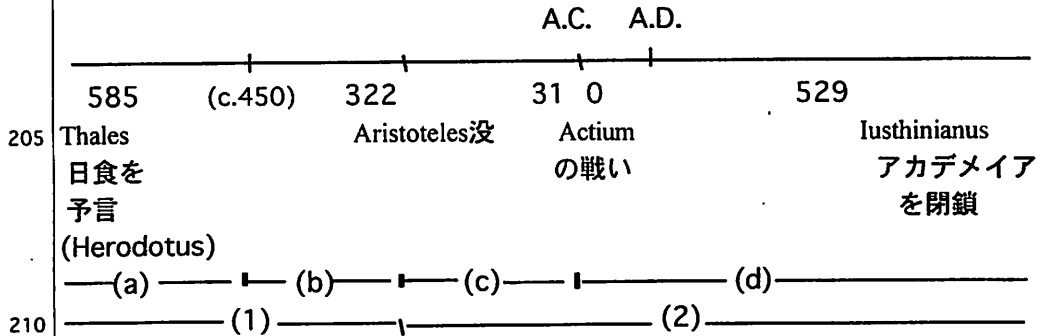
Platon: *Epist.* VII, 341C~342A

1. ことばは、*dialektike* (問答法) によるものが、本物であって、文字によることばは、二次的でしかない。

2. *Papylos* (パピュロス, 巻本) の保存状態が悪く、不完全である。
(後世4C ~ 9C普及, *Codex* 冊子本)

<古代哲学の時代区分の問題>

200 前6C ~ 後6C
(前585 ~ 後529) 1200年間



(1) Hellenic Age

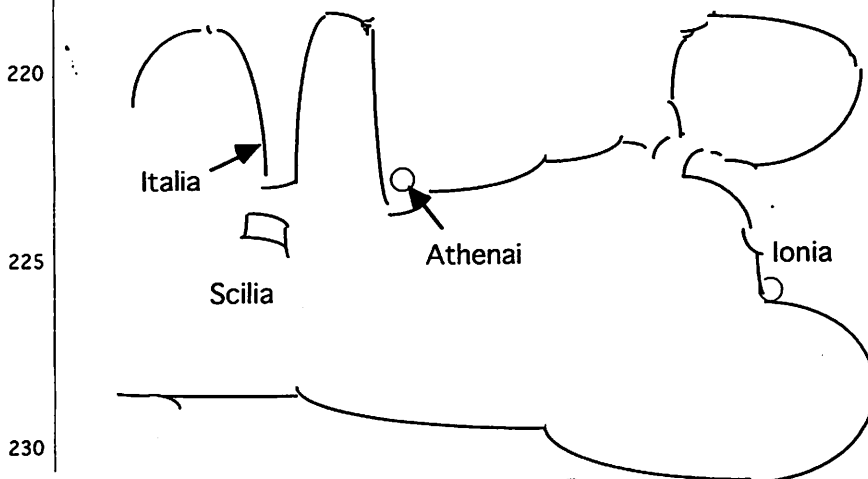
- (a) Ionia-Italia 哲学
- (b) Athenai 哲学

215 (2) Hellenistic Age

- (c) (狭義) Hellenistic Age
- (d) Greco-Roman Age

Hellenikos > Hellenic < Hellas の
Hellenism < Hellenismos

ギリシア化された
ギリシアを模倣した



地中海世界全体が舞台となる。

322 A.C. で区分する理由

235

(1) ここで、思想の流れ、発展がとまる。

Aristoteles に至るまでは、先行する人を継承して、その思想を批判、発展させている。これより後では、こういうことは、はっきりとは行なわれない。

Stoa派, Epicuros, Skeptikoiは, Aristotelesから出発しているのではない。

240

(2)アレクサンドロスによって、polis による生活形態から、imperiumの形態に変化した。政治と、個人的倫理が分裂した。

polis 個人の生活と政治が強く結びついている。

245

imperium . . . 公共的生活（政治）と切り離された純個人的倫理の生じる余地がある。政治が人民にとって超越的なものになる。個人の生活の安定が人々の関心の中心となる。

前半 : Hellenic . . . 人はいかにしてよきpolisをつくり得るか、よく生きることが
できるか？

250

後半 : Hellenistic (Hellenism) . . . 人はいかにして、このよこしまな世にあって、少なくとも自分は幸せであり得るか？

しかし、後期には、少なくとも個人の自覚、靈性が深くなったとってよいのではないか？

255

ἀταραξία (ataraxia : わずらわされないであること)

Greco-Roman : 政治的には Roman

文化的には Grecum (ラテン文学にしてもギリシア文学が基礎になっている)

260

キリスト教の立場

このユダヤ思想が完成されるやめにもギリシア思想の洗礼を受けなければならなかった。→ギリシア語へ koine

265

. . . 395 476 529

東西分裂

西ローマ滅亡

アカデメイア閉鎖

270

275

序説への補足

3. 史料の問題（書かれた文字，テキストの問題）

280

例えば，プラトン(Pl.)の著作の中に，Pl.の思想を見い出そうとする我々にとって，水をさすようなPl.自身の言葉がある。プラトン『第七書簡』Ep. VII, 341C4-D3

285

οὐκ οὐκ ἐμόν γε περὶ αὐτῶν ἔστιν
σύγγραμμα οὐδὲ μήποτε γένηται· ῥητὸν γὰρ οὐδαμῶς ἐστιν 341,c,5
ὡς ἄλλα μαθήματα, ἀλλ' ἐκ πολλῆς συνουσίας γιγνομένης
περὶ τὸ πρᾶγμα αὐτὸ καὶ τοῦ συζήην ἐξαίφνης, οἷον ἀπὸ πυρὸς
πηδησαντος ἐξαφθὲν φῶς, ἐν τῇ ψυχῇ γενόμενον αὐτὸ ἑαυτὸ 341,d,1
ἤδη τρέφει. καίτοι τοσόνδε γε οἶδα, ὅτι γραφέντα ἢ
λεχθέντα ὑπ' ἐμοῦ βέλτιστ' ἂν λεχθείη·

290

「この問題(philosophia)について，私の書物はないし，これからもないだろう。何故なら，それは他の学問のように，けっして語られうるものではないからである。それはむしろ，ことがらそのものについて，多くの共在と共生を重ねているうちに，突如として，いわば，火花が散って光が点火される如くに，魂の中に生じる。一旦生じた後は，おのずから成長していく。ただし，これだけは私はよく知っているが，そのことが書かれたり，語られたりするものであるならば，誰よりも私によってこそ，もっともよく語られうるであろう」

300

Pl.が，書かれた文字をあまり評価しないことは，その意図からして，まことにもっともなことである。しかし，このことは，実は，ものを書くことに身骨を削り，苦勞した人々であってはじめて実感できることである。自分が考えていることと，書かれたこととの間のギャップを鋭く感じ取るからである。

305

プラトン『パイドロス』 *Phaidros(Phaedrus)* 278C 「哲人と文人」

・哲人（哲学者，愛知者，philosophos）・・・書かれたものの限界を知る。書かれたもの以上のものを自分の中にもっている人。

310

・文人（詩人 *poietes*，作文家 *logon suggrapheus*，法律起草家 *nomographos*）・・・長い時間かかって，ここを削っては，あそこに付け加え，あそこを削っては，ここを加え，という文章上の工夫をした以上の何ももっていない者が，哲人と区別された意味での文人。

プラトン『国家』篇の冒頭の文章。

315

「きのう，ぼくはアリストンの息子グラウコンといっしょに，ペイライエウスまで出かけていった。．．」 *Resp.* 327A sqq.

Pl.の死後，この箇所を幾通りにも語順を変えて工夫をした未定稿が発見された，と古人は伝えている。つまり，Pl.は，書いたことは自分のすべてである，ということをおくまでも否認し続けた人である，と言える。また，Pl.は生涯の最後まで書き続けている。

320

Phaidros(Phaedrus), 274C sqq.

logos --- 1)生きて魂をもったlogos(真に, zetesis(ゼーテーシス, 探究)のために親しい師弟の間の dialektikeの中にしか存在しない)

325

・・・学ぶ人の魂の中に知識とともに書き込まれる言葉.

--- 2)生きた魂をもつlogosのかけ(自分で自分を守ることができない)

・・・書かれた言葉、文字.

330

だから、心ある人は自分の一番大切な事柄を本気になって、文字で書くということとはしないであろう。しかし、もし書くとすれば、同じ道を歩む人々や自分が老いてからの覚書としてか、慰みか遊びとしてである。しかし、世の中に行なわれている下らない遊びより、ましではあるが。

335

→以上の点は、Pl.の著作に、Pl.の思想体系を求めようとするときには、かなり不利な条件となる。実際、これらの点は、数多くの(偉大な学者も含めて)人々によって、対話篇からPl.の体系的思想を引き出すことに否定的な見解をとらせている。

340

345

350

355

360

365

1 Miletosの思想家たち

1-1 Thales(585 B.C.)

1-2 Anaximandros (547/6 B.C.)

370 1-3 Anaximenes(没528-525 B.C.)

1-4 Miletosの思想家たちの総括

1-1 Thales(585 B.C.)

思想

375 彼の後に続くAnaximandros, Anaximenesとの全体の連関の中で重要性をもつが、タレスの思想そのものに関しては、あまりに資料が少なすぎる。

Arist. *Metaph.* A3, 983b6~27

380 「さて、最初に哲学した人々のうち大部分の者は質料の形で考えられる原理(アルケー)のみを、万物の原理であると考えた・・・まず、このような哲学の創始者であるタレスは「水(hydor)」をそれであると主張する。(この故に彼はまた、大地が水の上に浮かんでいるという見解を唱えた。)彼がこの考えをもつにいたったのは、おそらく、あらゆるものを養い育むものが水気をもっているという事実、そして、熱そのものさえも水から生じ、水によって生きるという事実を観察したからであろう・・・タレスがこの考えをもつにいたった理由

385 としては、いま述べたことと並んで、あらゆるものの種子(spermata)が、水気をもった性質のものであって、そして、水こそは湿ったものにとって、その本性の元となる原理にほかならない、ということもあるだろう。」

アリストテレスの見方

390 1. タレスは質料(素材, hyle, materia)の原理(アルケー)として水(hydor)を考えた。

2. タレスが水を原理として選んだ理由としてアリストテレスが推測するのは、水と生命との結びつきということである。

→自然万有が生きている(魂psycheをもっている)ものとして考えられた。生命の原理がそのまま万有の原理と考えられるということは、万有全体が生きていると考えられていたことを意味する。少なくとも、そういう考えを大前提として背後に置いてこそ、アリストテレスがタレスの見解の由来を上述のような形で推定したことも、よく理解できるだろう。

395

→プシューケー=ものを動かす性格のもの

1-2 Anaximandros (547/6 B.C.)

400 思想内容 [Simplicius, *In Arist. Phys.*, 24, 13 sqq.]

「彼の説によれば、アルケーは水でもなく、他のいわゆる要素(ストイケイア)でもなく、何か別の無限なる原質(ピュシス)であって、そこから生成が行なわれるところのもの、それらのものへとまた、必然(義務)に従って、消滅もまた行なわれることになる。なぜなら、それらのもの(auta, autá)は、時の定めるところに

405 従って、互いに不正の裁きを受け、償いをするようになるからである。と、このように彼はいくらか詩人的な言葉使いを用いてこれらのことを語っている。」

(1) 反対的なもの、宇宙的正義と時の秩序

(2) 無限なるもの to apeiron τὸ ἄπειρον

410 (3) 「生ける自然」と「神的なるもの」

(4) 科学史的なもの

1-3 Anaximenes(没528-525 B.C.)

思想内容

Simplicius, *In Arist. Phys.*, 24, 26 sqq.

415 「アナクシメネスは、．．．アナクシマンドロスと同じように基体となる原質を一にして無限なものとして主張しているが、しかし、アナクシマンドロスのようにそれを無限定なもの(aoriston, ἀόριστον)としないで、限定されたものとした。彼はそれがアエール(aer, ἀήρ)であると言うのである。このアエールは希薄さと濃密さによっていろいろと異なった在り方をとる。すなわちそれは、希薄になると火になり、
420 逆に濃くなると風になり、雲になり、さらに濃くなると水になり、さらに土になり、石になり、その他のものもこれらから生じる。彼はまた動は永遠であるとし、それによってまた変化も生じる、と言っている。」

(1) アエール ἀήρ

425 (2) 濃密puknotes, πυκνότης と希薄manotes, μανότης 一質と量

(3) プシューケーpsyche, ψυχήとしてのアエール

まとめ 1 Miletosの思想家たち

430 アリストテレスは、自然学の始まりこそ哲学の始まりであるという観点からタレスから哲学が始まるとした。しかし、そのこと自身が、哲学にとって普遍的な問題を含んでいる。

[Arist. *Metaph.*A2,982b11-17]

「なぜならば、人間は、現在もそうであるように、そもそもの最初において、驚く
435 ということthaumazein, θαυμάζεινによって知を求め(哲学し)philosophēin, φιλοσοφεῖν始めたのであるから。すなわち人々は、最初は手近に見られる不思議な現象を驚きいぶかり、ついで、そのように少しずつ前進しながら、例えば月の示す様々な状態、太陽や星々の状態について、さらに万有の生成について、といったように、次第にもっと大きな事柄について疑念をいだくようになっていった」

440 ①. 万有に関する問いと答えに対して道を開いたものとして、どうしても看過しえないものに、Hesiodosをはじめとする一連の神話の体系があった。

[Arist. *Metaph.* B4, 1000a9 sqq.]

445 「ヘシオドス一派をはじめとする、すべてのtheologoi(神話家たち)である人達は、ただ彼等自身にだけ納得のいくことに考慮を払い、我々のほうは軽視した。何故なら、彼等は神々から始め、神々から生じたとするから．．．神話的な仕方で学者的説明を行なう人々については考察するに値しない」

神話的な仕方で学者的説明を行なう人々 οἱ μυθικῶς σοφίζομενοί

450 ⇨論証によって説明する人々 οἱ δι' ἀποδείξεως λέγοντες

455 ミレトスの思想家たちは、万有の説明にあたって神話的な神々の名を排除し、そのことによって合理的思考の第一歩を踏み出した。「電光」という現象を「ゼウス大神の怒り」によって説明する(ホメロス)ことと、「風による雲の破裂」であると説明する(アナクシマンドロス)こととの間には、本質的な違いがある。前者はいわば閉じられた説明であるが、後者には発展的修正の可能性が開かれているからである。万有のアルケーの問題についても同様であり、彼等の物質的位相における

答が先人の考えには何か不都合な点があるとして修正され発展していることを我々は見てきたが、その発展修正は、人間が自然の総体、細部についての知識を追及する限り、限りなく続けられるであろう。万有のアルケーが水であるという見解と、
460 万物を構成する要素はhydrogenであるとする見解(19C)の間には、確実なつながりと連続性がある。この点に関する限り、我々にとってミレトスの思想家の仕事は、今日これまで継承されてきた自然科学と呼ばれる人間の思考の発端であると言うことができるだろう。(cf. J. Burnet, *Early Greek Philosophy*)

465

2 哲学の内的課題の自覚化

2-0 Introduction

2-1 Xenophanes (c.570-c.475 B.C.)

2-2 Heracleitos (c.500 B.C.)

470 2-3 Pythagoras(c.570-510--B.C.)

2-0 Introduction

Pythagoras Samos島出身 → 南イタリア Croton

475 Xenophanes Colophon(Ionia)出身 → イタリア地方で漂泊の旅

Heracleitos Ephesos(Ionia)出身 世を避けて、孤独の生涯

この3人の人物は、それぞれ極めて独自の思想をもっていたが、哲学
φιλοσοφίαの自覚を人間の一つの生き方の自覚として捉えるようになっていく重
480 要な一段階を成した人々である。これに対して、ミレトスの思想家たちにおいては、
彼等の思想と生活態度がどのような関係をもっていたかが明確ではない。この3人
の思想家たちにおいて「知を愛する」ということが強調的に捉えられていること
を見る。

485 Pythagoras

自らをphilosophus, φιλόσοφος (哲学者) と呼んだ最初の人である。

Cicero, *Tusculanae Disputationes*, V.3.8-9

ピュタゴラスがPhiliusの王であったLeonと会談した時の話

(Leon) あなたが最も得意としている学術は何か?

490 (Pyth.) 私はそのような学術を身につけていないが、私はphilosophusである。

人間の生はオリピックの群衆のようなもので、そこには3通りの動機からやっ
てくる。まず、賞を獲得しようとする人があり、商売をしようとする人がある。そし
て、それとは別に、ただ何が行なわれているかを見るためにやってくる人がいる。

495 同様に人生においても、名誉、金銭を求める人は多いが、名誉、金銭とは無関係に
熱心に知を求める人がある。それがphilosophusである。

Xenophanes

Fr.2 (要点) 人々はオリピックの勝者を称えるが、私のほうが彼等よりも称賛
に値するのだ。何故なら、知恵σοφίηは体力ῥώμηより勝るから。

500

Heracleitos

その人自身の言葉が残っている人で最初にφιλόσοφοςという言葉を使った人。

Fr.35 「φιλόσοφοςである人は、実に多くの事の探究者でなければならない」

特に、知（智）に重点をおいた断片が多い。

505

2-1 Xenophanes (Ξενοφάνης ὁ Κολοφώνιος c.570-c.475 B.C.)

思想内容

1) 「知」と「思惑」 δόκος

510

Fr.34 「人の身で確かなことを見たものは誰もいないし、これから先も知っている者は誰もいないだろう——神々についても、私の語るすべてのことについても。

仮にできるだけ完全に本当のことを言い当てたとしても

彼自身がそれを知っている訳ではないのだ。ただすべてについて思惑があるのみ。」

515

Fr.18 「まことに神々は、はじめからすべてを死すべき者どもに示しはしなかった。人間は時とともに探究によってよりよきものを発見していく。」

生き方についての哲学の自覚が彼においてどのような基盤の上に基づいて行なわれていたかを、これらによって見て取ることができる。古代ギリシア初期において無意識的であったものが、ここではじめて自覚的に表現され、後のギリシア哲学の根幹をなすものが語られている。

520

・「思惑」と「知」の区別——無知の自覚(Fr.38)

・人間は自分自身の努力によってより優れた認識を獲得することができる(Fr.18)

525

前者：独断の拒否

後者：不断の知的努力の要請、あきらめの拒否

→ Parmenides, Socrates → Platon

神における知の在り方と、人間における知の在り方とのこのような対比は、ホメロス以来ギリシアの伝統的観念であるが、それに彼は定式を与え、後の哲学の根幹となるものを示した。

530

2)theologia

a)ホメロス、ヘシオドスにおける神の観念に対する批判

b)真の神は如何なる性質のものでなければならないか？

535

Arist. *Metaph.* A,5 986b24-25

「彼は宇宙全体に目を向けて、神は一者であると言ったのである」

これは一種のpantheismusであるが、そこまでクセノパネスに確信をもって押し付けるのは難しいのではないか。神に関する断片からうかがえる思想は一種の人格神であると思われる。クセノパネスがエレア派の祖であるという伝承から、パルメニデスはその弟子であるとされ、パルメニデスの思想をそのままクセノパネスにまでさかのぼらせることがDoxographiによってなされたと思われる。（パルメニデスは真の存在を「丸い」(Fr.8,1.43)と表現している）

540

全般的には、判断保留が賢明であると思われる。

545

2-2 Heracleitos (Ἡράκλειτος Ἐφέσιος c.500 B.C.)

Ephesos・・・イオニアの都市国家

年代・・・不詳

2012/9/18

- 550 ヘラクレイトスのあだ名
 ・ αἰνικτῆς 謎(をかける)人 . . . Timonの命名 Diog.Laert. IX 6
 ・ σκοτεινός 暗い人(obscurus) . . . Cicero, *de finibus*, II 5, 15 etc
 ・ μελαγχολία Diog.Laert. IX 6
- 555 通説 1) Πάντα ῥεῖ
 2) 火(πῦρ)が万物の ἀρχή
- 1) 流転思想
 これがヘラクレイトスの中心思想であったか否かにはかなりの疑問がある。
- 560 Platon, *Cratylus* 402A
 「ヘラクレイトスは、万物は移りゆき、何物もとどまらない、と言い、そして、存在を川にたとえて、汝は同じ川に二踏み入ることはできないであろう、と言った。」
- 565 2) 火(πῦρ) - 万物の ἀρχή
 Arist. *Metaph.* A3, 984a7
 「メタポンティオンのヒッパソスとエペソスのヘラクレイトスは火をそれ(質料的始元)であるとする」
 (タレスの水、アナクシメネスの空気に対応するものと考えられている)
- 570 もし、この解釈が正しいならば、ヘラクレイトスにおける火はタレスの水やアナクシメネスの空気と同じレベルのものとなり、ヘラクレイトスはミレトス派の末流としての意味しかもたないことになるだろう。けれどもこれは、アリストテレスが初期の哲学者たちから、アリストテレス自身の「質料因」にあてはまるものだけを取り出そうとするところから生じた見方であることが、ヘラクレイトス自身の言葉に照らしてみればわかるであろう。
- 575 Fr.90 「万物は火の交換物にして、火は万物の交換物。ちょうど品物が黄金と換えられ、黄金が品物と換えられるごとく」
- 580 πάντα ↔ πῦρ
 ἀνταμοιβή
- Fr.10 「. . . 万物から一が生じ、一から万物が生じる」
- 585 ヘラクレイトスにとって、生成の方向は一方的ではなく回帰的であったといつてよい。
- Fr.60 「上り途と下り途とは一つにして同じもの」
- 590 途の転倒そのものが彼にとって重要であった。
 世界の把握の仕方は、ミレトス学派の人々とは根本的に異なっている。ヘラクレイトスにおける火は、アリストテレス的に解釈された水とか空気とかいったものとは根本的に性格を異にして、全く違った性格をもっている。Fr.30, 90 etc. のヘラクレイトスの言葉を文字通り受けとめなければならない。燃える炎——そこでは、

595 炎の炎としての安定は、事物の生から死、死から生へのたえまなき過程そのものによって成り立つ。それは「変化することによって安息している」(Fr.84a)のであり、そして、世界とはまさにそのようなものなのである。

ヘラクレイトスの考えは流転を含むが、その流転の在り方そのものが重要なのである。

600

ἄρμονίη (調和)

μέτρα (尺度)

変化そのもののもつ秩序を示す。しかしそれは変化しているものをただ眺めさえすれば分かるというようなものではない。

605

Fr.54 「あらわならざるἄρμονίη (調和) は、あらわな調和にまさる」

Fr.40 「博識 (πολυμαθίη) は覚識 (さとり : νόον ἔχειν をもつ) を教えない」

610

πολυμαθίη νόον ἔχειν οὐ διδάσκει.

Fr.50 「我に聞くにあらず、ロゴスに聞きて、万物が一であることを認めるのが知σοφόνである」

615

ここでの公的なものξυνόν (共通なもの) は、Fr.2とかさね合わせて見ると、Fr.2で言われているロゴスの事になり、ロゴスは世界を支配する神の一なる法ということにほかならない (ロゴス=理)。そのようなロゴスの洞察に根拠付けられているのがνόοςであると言えよう。

620

自己の探究と「魂」

ヘラクレイトスの思想は、単なる自然に対する好奇心だけでなく、人間の生は世界を支配する理法に基づいており、その探究が行なわれなければならない、とするものである。その理法の内容は非常にユニークなものである。ミレトス派の人々とは著しく異なる、ヘラクレイトスの次の言葉は何を意味するのか？

625

Fr.101 「私は自分自身を探究した」 ἐδιζησάμην ἐμεωυτόν.

630

万物 (宇宙・自然) の生成の問題が中心課題であったかにみえたミレトス派の人々に対して、ヘラクレイトスは、外の世界の在り方ではなく、自己の内部の在り方を探究したという。

思考し健全な思慮をたもつものとしての自己を探究することは、自己の「魂」を探究することでもある。ここで、自己の「魂」が問題として浮かび上がってくる。

635

→ ヘラクレイトス以前の「魂」は、ホメロス以来、生命原理としての意味を帯びており、そこには、思考・感覚・意識といった働きは認められず、それらの働きは、テューモスθυμός、ノオスνόοςといった言葉が独立して用いられていた。これに対して、ヘラクレイトスの「魂」は、まず何よりも、思考・感覚・意識といった働きの座として、知的な働きの座として捉えられていると言える。すなわち、「魂」は単に、生命の原理としてだけでなく、思考・感覚・意識の能力、また、言葉を介

640 しての認識，理解能力の原理としての在り方をもっているのである。

Fr.115 「魂には自己を増大させるロゴスがそなわっている」

645 と言われるとき，「魂」にそなわったロゴスは，自己を伸張・増大させて，個人の魂のレベルを超えて，宇宙の魂にまで増大成長するものとも考えられる（ミクロコスモス—マクロコスモス）可能性を秘めたものである。

2-3 Pythagoras(Πυθαγόρας ὁ Σάμιος c.570-510--B.C.)

650 イオニア地方，ミレトスの対岸にあるサモス島に生まれ，前530年ごろ，ポリュクラテス王の専制政治を嫌って遠く南イタリアのクロトンCrotonに移り住み，その地で宗教的学問的な教団をつくった。のち迫害を受けて，メタポンティオンMetapontionに退き，そこで没した。彼の後継者たちは，「ピュタゴラス派の人々οι Πυθαγορικοί」と呼ばれながら，ギリシア各地にあって数世紀の長きにわたり，その独特の思想の伝統を守り続けた。

655

Platon, *Politeia*, 600B

「ちょうどピュタゴラスが，彼自身もそのことの故に特別に敬愛され，また後継者たちも，いまでもなおピュタゴラス的な生き方と呼びながら，その道を守り，他の人々の間で目立った存在であるとみなされているようにね」

660

我々は，この「ピュタゴラス的な生き方」と言われたものの中核を見極めなければならぬ。しかしながら，ピュタゴラスは，後の人々に与えた影響の大きさの点で最も重要な人物でありながら，その生涯，思想の正体をもっとも掴みにくい人である。その理由として以下のことが挙げられる。

665

- ・ピュタゴラスが書いたものが残っていない。そもそも何も書かなかった。それ故，残された断片によつて語らしめることは不可能である。
- ・ピュタゴラスと同時代のブッダと同様に，彼の死後さまざまな伝説が生じ，真実がもやの中につつまれてしまった。

670

Porphyrrios, *Iamblicos, Vita Pythagorae*

- ・この宗教団体は秘密主義の傾向が極めて強い。後のさまざまな発見をすべて開祖ピュタゴラスに帰する傾向が強い。

675

ピュタゴラス派の人々によって，オルベウス教と呼ばれる宗教との結び付きのもとに，「人間の生き方」としての哲学に特別の内容がこめられるようになり，またそのことと密接に関連しながら，新たな原理と物の見方——数と数学的世界観——が哲学の歴史に導入された。

思想内容

680

数学的科学的側面と宗教的側面を両方合わせ持ち，その両側面が密接に結び付けられていた，ということが出来る。以下，その両側面について，そのKey-Ideaを挙げながら，それらのKey-Ideaの連関をみてゆことにする。

宗教教義

685

人間の魂は本来不死なるものであり，神的なものである。肉体は死んでも魂は滅びることなく，他の動物なり人間なりの別の肉体に移り宿る。

↑
9/11
152
παλιγγενεσία (μετεμψύχωσης)
κύκλος γενέσεως

690 この世において人間に課せられた課題・目標は、魂の神性の回復と転生からの解放をめざして、魂の浄めκάθαρσιςのために努力精進することである。
(オルペウス教との関連も言われるが、詳しいことは分からない。)
(仏教との類縁性を指摘することもできるが、そこに起源があるかどうかは不明。)

695 このような目標達成のため、学問知識に積極的な意義を与えた。特に、数学、天文学が魂の浄めに至るもっとも有力な道とされた。
何故、数が重要視されたか。

Aristoxenos ap. Kraemer, *Anecdota Graeca Parisiensis*, 1172

「肉体の浄めのためには医術が必要であり、魂の浄めのためにはμουσικήが必要である」

700 μουσική (ムーシケー)

- ・ 一般的な意味 Μοῦσαの女神が司る学芸
→ 浄めのためには学問一般が必要であると、解することもできる。
- ・ 音楽 音楽はその美と調和によって、魂に深い作用を及ぼす。
(Crotonは、ギリシアの医学の中心地のひとつであった。

705 医術による浄め・・・下剤その他によって体の悪い体液を外に出してしまう)
宗教的儀礼を音楽との結び付きは、どこにおいても共通している。

音楽が人間の魂に及ぼす力の秘密はどこにあるのか。

710 Porphyrus, *In Ptolemaei Harmonica*
Diog. Laert. VIII, 12

「音楽は、音階άρμυνίαによって構成される。ピュタゴラスはこの音階の原理を一弦を用いてἐκ χορδῆς発見した」

άρμυνία・・・適合させる、弦を張る、調律、音階、調和

715 伝承によると、ピュタゴラスは、宇宙を、秩序を意味するκόσμοςという名で呼んだ最初の人である。上述のような一般化ができたのは、ピュタゴラスに、宇宙そのものがκόσμοςであり、άρμυνίαであるという直観があったればこそであろう。

720 天体音楽説

Arist. *De Caelo*, B9, 289b15-29

「運動する諸星の間には、その発する音が共鳴するので、調和(άρμυνία)があると主張することも・・・」

725 人間の経験の重層化

730 ピュタゴラス派の思想を評価するに際して、単に(自然)科学的な人間は、上述の数的側面のみを取り上げ、魂の不死、宇宙のハルモニアーといった見方を捨て去るであろう。また、単に宗教的な人間は、魂の不死や宇宙のハルモニアーという思想のみを取り上げ、数的側面を捨て去るであろう。ピュタゴラスの死後、その弟子たちは、師の教えの宗教的神秘的側面を受け継ぐ者たちοἱ ἀκουσματικοί と、数学的科学的側面を受け継ぐ者たちοἱ μαθηματικοίとに二分されたと伝えられる。しかし、ピュタゴラスにとって、この二つの側面を切り離してしまえば、そもそ

も彼の思想は意味を失ってしまうだろうし、また、哲学史においても名を残すことがなかったであろう。

735

3 エレア学派

3-1 Parmenides (acme c. 475 B.C.)

3-2 Zenon (acme c.450 B.C.)

3-3 Melissos (acme c.440B.C.)

740

3-1 Parmenides (Παρμενίδης ὁ Ἐλεάτης)

年代

Platon, *Parmenides*, 127A

745

(パルメニデスとゼノンがアテナイにやって来てソクラテスと対話する)

「その時パルメニデスはかなりの高齢で、髪白く、顔美しく、年齢65に達しようとしていた。ゼノンはその当時40歳に近く、長身で容姿端麗であった。... その時、ソクラテスはたいへん若かった」

プラトンの架空の状況設定であるが、当時のギリシア人に読まれることを考えるなら、年齢については事実これくらいであったろう。

750

パルメニデス 65歳

ゼノン 40歳

ソクラテス 20歳(?) (B.C.469-399)

→ パルメニデス 515～acme 475 B.C.頃

755

ゼノン acme 450 B.C.頃

パルメニデスの詩と思想内容

Fr.1 序歌

760

「この身を運ぶ駿馬らは、わが心の思いのとどくきわみのはてまで
私を送った——ダイモンの名も高き道へと私を導き 行かしめたのち。

.....

..... 汝はここで すべてを聞いて学ぶがよい——

765

まずはまるい「真理」のゆるぐことのないその心も、

そして死すべき人の子らのまことの証なき思惑も。

それを汝は学ぶことになるう——いかにして思惑されるすべてのことが
すべてに行きわたりつつ よしと思われてあらねばならなかったかを」

770 以上は、暗いこの混迷したドクサ(思惑)の世界を逃れて、光の世界に超え出たいきさつ。自分に先立つ哲学者たちの語ることがドクサにすぎないとして、女神の口を通して真理を語る。

真理とは何か?

775

パルメニデスは、彼に到るまでの世界、自然を知ろうとする試みがどのような基盤に依っているかを見ようとした。世界を理解しようとすることは、我々に現われてくる世界(現象)をそのまま信じるのではなく、その真実の在り方を理解しようとするのである。ということとはつまり、われわれには、現われてくるものを受動的に受け入れるだけの能力とは別に、真の在り方を理解するための能力があることが前提されていることを意味する。

780

νόος (ノオス, 知性, 理性), λόγος (ロゴス, 理)

世界を理解し知ろうとすることが、νόος, λόγος の導きに従って世界を理解することであるなら、一度選んだこの行き方を、どこまでも徹底的に守り通さねばならない。感覚に現われるものと、中途半端に妥協してはならぬ。

785

Fr.4.1.

「現前してはいないけれど知性（ノオス）には現前しているものをしっかりと見よ」（or 「現前していないものを知性（ノオス）によって、確実に現前しているものとして見よ」）

790

Fr.3

「なぜならば、思惟すること(νοεῖν)とあること(εἶναι)とは同じであるから」

795 このような徹底的反省に基づいてパルメニデスの思想は成立する。「あるもの」と「あらぬもの」が徹底的に峻別される。

Fr.2

800 「いざや 私は汝に告げよう、汝この言葉を聞いてよく受け入れよ——
探究の道として考えられるものは、ただこれらあるのみぞ
すなわちその一つとは「ある」そして「あらぬ」ことは不可能という道。
これは説得の女神(Πειθώ)の道である（真理('Αληθειή)に従うがゆえに）。
他の一つとは「あらぬ」そして「あらぬことが必然」という道
この道はまったく探ね得ざる道であることを 私は汝に告げる
805 なぜならば、汝はあらぬものを知ることでもできなければ（それはなしえぬこと）
語ることもできないから」

考えられている限り、そのものは無ではなく、何かあるものである。

Fr.8.1~

810 「語られるべき道として、なお残されているのはただひとつ——
すなわち [あるものは] あるということ。この道には非常に多くのしるしがある。
・・・」

815 「あるもの」τὸ εἶναι (Attic, τὸ ὄν)のもっているさまざまな特色を積極的に引き出しているというより、感覚の世界で自明のことと考えられているものに対する否定の宣言である。パルメニデスがτὸ εἶναι について実際に言葉を費やして語らねばならなかったのは、一般の人々がとっている第三の道、すなわち、ありかつあらぬ世界、に対する否定の言葉であった。パルメニデスの詩の中には否定詞が非常に多い。(οὐ, οὐ ··· οὐδέ, οὔτε ··· οὔτε, ἄ-) 否定的な反問も多い。

820

「あるもの」について何が否定されなければならないのか？

・生成消滅——あるものがあらぬものになり、あらぬものがあるものになる。

Fr.8,19~21

825 ・時間——「あった」とか「あるだろう」とかいうこと
「今あるのである——挙にすべて」(Fr.8,5)

・性質的变化——例えば、緑であるものが緑でないものになる。

・運動

・多数性——あるものを複数で考えることはできない。

830 τὸ εἶον(τὰ ὄντα がそれまで日常的に使われており、単数形で
表わしたのはパルメニデスが最初である)

肯定的に表現すれば、「あるもの」は唯一、不生、不滅、不動、等質の充実体である(とい
いことになるが、結局、不生、不滅、不動などのように、否定を含んだ表現にならざるを得
ない)。

835

推論を示すparticle(γάρ, ἐπεί, οὖν, τοῦ ἕνεκεν)が多い。パ~~ル~~メルメニデスのλόγοςは我々
の言う「論理」に近い。これが叙事詩の形式の中で使われていることは驚くべきことである。

840 哲学史上はじめて、ロゴス性と感覚性、「思惟される事実」と「感覚される事実」との間の
鋭い乖離の意識、そして前者こそ真実であり、後者は虚妄にすぎないという宣言が、この
上ない明確さをもって提示された。このことによって、それまで行なわれてきた自然学的探
究に対して根本的な困難が示され、この(パルメニデスの)基本的格率に基づいて如何に自然
を説明するかが以後の課題となる。

Fr.8, 50~52

845 「ここで私は真理についての信ずべき言葉と考えを

やめることにしよう。これより後は、汝すべからく死すべき者どもの
思惑δόξαを学べ。——我が言の葉(ことのは)の虚構を聞きながら」

850 感覚的原理(「火」または「光」と「夜」)から出発して、この宇宙の構造はどのような
ものであるかという伝統的な cosmology の形式に基づいて感覚界が説明される。なぜ、パ
ルメニデスは、自分の真理を真理として片付けなかったのか? 思惑δόξαと断わりながら、
何故、このような感覚界の詳細な説明を行なわなければならなかったのか?

855 パルメニデスもまた、「死すべき者ども」の一人として、思惑の世界に住み、感覚的事実
に対処しつつ生きていかなければならない宿命にある。パルメニデスは、一旦は女神の住む
真理の世界に連れていかれたが、再び、この世界に戻ってこなければならぬ。とすれば、
大切なことは、「いかにして、思惑されるすべてのことが・・・よしと思われてあらねばなら
なかったかを学ぶ」(Fr.1, 31-32)ことであり、思惑の成立根拠を見届けて、誤りを誤りと
意識し、それを真実と混同しないことであろう。そして決して「物知り分ち得ぬ群衆とな
860 なって引き回される」(Fr.6,6-7)ことのないようにすることであろう。これが、「死すべき
者どもの考えが汝を追い越すことのないように」(Fr.8, 61)という言葉にこめられた女神の
計らいであった。

865 それ故、パルメニデスの基本的洞察は決して動かない。けれども、現象を端的に否定する
のではなくて、それを理(ロゴス)にかなった仕方(σώζειν τὰ φαινόμενα <現象を救うこと>)ことは、パルメニデス的意味で考えるなら、不可能であり、「現象は救え
ない」ということがパルメニデスの下した宣告であった。そこで、その現象を如何にして救
うか、現象を救うことが、この後の哲学者の課題となった。

3-2 Zenon (Ζήνων ὁ Ἐλεάτης)

870 ロゴス性を徹底させ、現象界を否定するパルメニデスの主張は、まだロゴスと感
覚の区別がなかった時代にあつては、パラドクシカルに思われ、直接の論敵ピュタ
ゴラス派をはじめ当時の多くの人々から、猛烈な反論乃至は嘲笑さえも受けること
になった。(cf. Platon, *Parmenides*)

875 ゼノンが単に、パルメニデスのような否定宣言を繰り返していたのなら、ロゴス
性と感覚(性)の二つの相反する考えはお互いに接触し合うことはできなかったであ
らう。しかし、ゼノンはそうしなかった。そうする代わりに、彼は師(パルメニデ
ス)を弁護するために独特の論法を持ち出した。すなわち、相手側の主張するとこ

ろを一度前提 $\acute{\upsilon}\pi\acute{o}\theta\epsilon\sigma\iota\varsigma$ (hypothesis)として受け入れ、その上で、その前提からどのような相矛盾した帰結が出てくるかを証明して見せることによって、間接的に相手の主張を論駁するという、独特の論法を編み出した。

帰謬法 $p, \sim p$
 $[(p \supset q) \wedge \sim q] \supset \sim p$

885 アリストテレスはゼノンを $\delta\iota\alpha\lambda\epsilon\kappa\tau\iota\kappa\acute{\eta}$ (dialektike, 問答法, 対話術)の創始者と呼んでいるが、これは確かに正当な着眼であろう。一度、相手の主張に入り込んで、論理という公共のルールに従って展開させる。

890 今日まで伝わるのは、ゼノン自身の言葉による「多」への論駁(二つ; Fr.1+Fr.2/Fr.3)と、アリストテレス(*Phys.* VI, c.9)の記録する「動」への論駁(四つ; 二分割[239b, 233a]/アキレウス[239b]/飛矢静止[239b]/走路[239b-240a])である。

「多」への論駁

895 Fr.1[Simplicius, in *Phys.* 140,34]+Fr.2[Simplicius, in *Phys.* 139,5]

(前提) もし、ものが多であるならば、

→その単位となるものが、大きさをもつとすると、その大きさをもつ単位の一つ一つは部分をもっているから、その部分もまた大きさをもつ。さらにその部分の部分も大きさをもつ。このことが無限に続けられる。従って、ものは大きさをもつものの無限の集まり(=無限大)となる。

900 →その単位となるものが、大きさをもたない考えると、それは加えても除いても何の影響もない無である。

一方では無限大、他方では何もない(ほど小さい)という結論になる。

905 この議論は、ピュタゴラス派に向けられている。

Fr.3[Simplicius, *Phys.* 140,27]

「もし、ものが多であるならば、その多がどれだけあるにせよ、それらは必然的にあるだけ、ちょうどそれだけあるのであって、それより多くもなければ少なくともないはずである。しかるに、あるものがあるだけ、ちょうどそれだけあれば、それらは有限であることになる。他方、もし、ものが多であるならば、その存在は無限である。なぜなら、それらの存在と存在の間には、常に他の存在があり、また後者の存在の間にも、また別の存在があるからである。かくて、その存在は無限である。」

915 結論: もし存在が多であるならば、その数は有限にしてかつ無限である。(直接には述べられない)

1880年代にカントールの論文が出てから、無限数に関する問題の研究がやっとなされるようになった。「あるだけ、それだけある」という記述は、ゼノンの言うように有限にのみ適用できるものではなく、無限についてもあてはまる、というのがカントールの論文の意味するところである。しかし、それは数の概念の変更を必要とするものであり、それがゼノンの論駁に対する直接の論駁となる得るかどうかは再考を要するだろう。

925 「動」への論駁[Aristoteles, *Physica*, Z, 9]

1)二分割 (一つの運動について) 空間および時間が無限に分割できる, それ以上分
2)アキレウス (二つの運動について) けられない最小単位というものはない, という前提の上に立つ.

930 3)飛矢静止 (一つの運動について) 空間および時間は無限に分割されることはできず,
4)走路 (二つの運動について) ある不可分の最小単位の集合によって構成される, という前提の上に立つ.

1)二分割

Aristoteles, *Physica*, Z, 9, 239b11-13

935 「第一の議論は, 場所的運動を行なうものは終局 (極) 点に至りつく前に, その半分の地点に至りつかなければならない故に, 動はありえないことについて述べたものである」

2)アキレウスAchilleus (と亀)

Aristoteles, *Physica*, Z, 9, 239b14-

940 「第二の議論はアキレウスと呼ばれているところのそれである. この議論の内容は次の通り, すなわち, 最も遅い走者でも, 決して最も速い走者によって追い付かれることはないだろう. なぜなら, そうする前に, 追いかける方は逃げる方が出発した地点に達しなければならず, 従って, より遅い方は常にいくらか先に進んでいなければならないからである. これは二分割の議論と同じであるが. . . 」

945

Russell . . . カントールによって証明された, とする.

Bergson . . . この問題に答えるには, アキレ~~ス~~に聞いてみればよい (感覚的事実の方を基準にし, それを優先させるもの) → 「時間ははたして空間であるか」

950

3) 「矢」 (「飛矢静止論」)

Aristoteles, *Physica*, Z, 9, 239b5-

(この箇所の text は不完全. 一応, Zeller の修正案に従う)

955 (要点) あらゆるものは, それ自己自身の大きさと等しい空間を占めているとき, 静止していると言われる. しかるに, 飛んでいる矢は, 一つ一つの瞬間 (「今」 τὸ νῦν) をとってみると, 常に自己自身の大きさと等しい空間を占めている. 従って, 飛んでいる矢は静止している.

4) 「走路」 (略)

960 Aristoteles, *Physica*, Z, 9, 239b33-

(アリストテレスは明らかにこの問題を誤解している)

3-3 Melissos (Μέλισσοσ ὁ Σάμιος)

965 政治家, 武人として傑出していた人物.

441-40B.C.彼の率いるミレトスの海軍がアテナイの海軍を破った年 (Purtarchus, *Pericles*, 26).

実際の年代順

パルメニデス→エンペドクレス→ゼノン→アナクサゴラス→メリッソス

970 イオニア方言の乾いた散文で、パルメニデスを擁護する。
パルメニデスの言葉の中に内包されながら、表面に出ていなかった論点を明確化し、さらには、ある根本的な点について、パルメニデスの考えを大きく修正した。

(以下の3点)

975 1) Fr.7 --- 「虚」(τὸ κενόν)
2) Fr.2,3,5,6 --- 「あるもの(実在)」は無限(ἄπειρον)である。
3) Fr.9 --- 「あるもの(実在)」は非物的なもの(σῶμα μὴ ἔχειν)でなければならぬ。

980 1) Fr.7 --- 「虚」(τὸ κενόν)
(要旨) 「虚」(τὸ κενόν)とは「何ものでもないもの(μηδέν)」ということに他ならず、何ものでもないものは存在しない(οὐκ ἔστι). そのことを運動が不可能であることとを、はっきり結び付ける。

もし仮に「虚」が存在しているとすれば、その中へともものが入っていくことができたであろう。しかし、そのような「虚」は存在しないのだから、そこへともものが入っていく余地はない。故に運動は存在しない。

985 パルメニデスは、「あるもの(実在)」が「あるものによって充実している」こと、また、それは「女神アナンケーの大いなる縛め(いましめ)の中」にあるから動き得ないことを述べた(Fr.8)が、(i)「虚」という言葉はそれ自体としては出てこず、(ii)また充実性と運動性の否定との結び付きも、必ずしも明確ではない。

990 この考えは、後に続く原子論の成立に大きな影響を与える。原子論の成立は哲学史上非常に重要であるから、この点で、メリッソスもまた、注目すべき人物である。

2) Fr.2,3,5,6

995 (要旨) 「あるもの(実在)」は無限(ἄπειρον)である。

あるもの(実在)は多ではなく一である。あるものが一であるためには、それは限界をもつものであってはならない。なぜなら、もし「あるもの」が限界によって限られているなら、その限界とは、一体、何に対する限界であるのか。その限界の外には何があるのか。それは空虚ではありえない。なぜなら、空虚は存在しないから、さりとて、虚ならぬ何らかの実在でもありえない。なぜなら、その場合には、「あるもの」は一つではなく、二つであることになろう。従って、「あるもの」は限界(πέρας)によって限られていない。即ち、無限(ἄπειρον)である。

1000 これは、パルメニデスの見解に対する根本的修正である。パルメニデスにとって、
1005 実在の完全性は完結性を意味し、限界によって限られているものであった(Fr.8.31-32)。それは丸い球にたとえられさえした(Fr.8.42)。メリッソスは、このやや素朴な表象にロゴス的反省を加えた。

1010 3) Fr.9 --- 「あるもの(実在)」は非物的なもの(σῶμα μὴ ἔχειν)でなければならぬ。

(要旨) 実在が多ではなく、一であることを守るために述べられたもの。

1015 物的なものは厚さをもつものである。そのようなものは、いくつかの部分に分けられることになろう。もしそうなら、実在は一ではなくなる。従って、実在が一であるためには、それはσῶμαをもたないものでなければならぬ。

1020 パルメニデスの根本的立場では、実在は思惟の対象でなければならないから、実在が非物体的であることが含意されている。けれども、「あるもの(実在)」が「あるものによって充実している」とか「丸い球体に似ている」とか語られるとき、あるいは、それが同質一様である不可分であることが強調されるとき、そのような強調自体によって、彼の「あるもの(実在)」が拡がりをもち、部分をもった「物体」であるという印象を、人はどうしても受けざるを得ないであろう。それ故、メリッソスはパルメニデスの根本的立場を生かして、そのことを明確化した。

4 自然哲学再建の努力

1025 4-1 Empedocles
4-2 Anaxagoras

4-1 Empedocles (Ἐμπεδοκλῆς ὁ Ἀκραγαντῖνος)

1030 1)人物像および全般的问题
2)序歌 Fr.1~5 (略)
3)四元と「愛」と「争い」
4)宇宙の周期
4')生物発生の四段階 (略)
5)アナンケー (ἀνάγκη:必然) の宣告——『カタルモイ』
1035 6)2つのキュクロス(κύκλος)の相関

1)人物像および全般的问题

1040 第84回オリンピア祭(444 B.C.)の時にアクメーであった(アポドロス)。多方面にわたる活動家であり、様々な伝説をまとめて我々に現われてくる。
・祖国アクラガスのために働いた政治家。
・弁論術の創始者。Gorgiasの師。
・医者としても有名。意識の座を心臓に置いた。
・農業技術家。
・予言者風の宗教家。
1045 彼の死について、様々な伝説が残っている(e.g.エトナの火山に身を投じて神と化した)。
>特に、注目を引く点<

1050 自然学的な人間としてのエンペドクレスと宗教的な人間としてのエンペドクレスとが、いかにして併存し得るのか。これは、ピュタゴラスの場合と似ているが、彼の場合、外面的にも特にきわだって現われている。彼の詩の断片は、『自然について(ペリ・ピュセオース)』Περὶ φύσεως Fr.1~111.というグループと『浄め(カタルモイ)』Καθαρμοί Fr.112~147.という2つの独立したグループに分かれており、その2つのグループは内容的に矛盾するようにさえ思われる。様々な学者が苦心して、この矛盾を説明しようと試みている。

1055 3)四元と「愛(Φιλία, ピリアー)」と「争い(Νεῖκος, ネイコス)」

Fr.3 は、或る条件における感覚の擁護であって、哲学は最終的には思惟とロゴスの道でなければならない。パルメニデスの原則はなお、働いている。

1060 Fr.11 「おろかな者たち！ 彼らには遠きに及ぶ想いが無い。

彼らは、かつてはなかったものが生じてくると夢想し、あるいは
何かが死んで全く滅び絶えると夢想するのだから。」

1065 Fr.12 「げに全くあらぬものから生じてくるとは、不可能なこと、
また在るものが全く滅んでなくなるとは、起こりようもなく聞いたことも
ない。
人がどこにそれを絶えず押しやろうとも、まさにそのところにいつもあ
るのだから。」

1070 このパルメニデスの原則をこわさないで、如何にして自然哲学を展開することが
できるか、エンペドクレスは何らかの意味で窮極の物質を複数考えておいて、何ら
かの仕方ですれらの混合と分離によって説明する。

四元(根)・・・火、空気、水、土

1075 Fr.6 「まずは聞け、万物の四つの根(ρίζωματα)を。
輝けるゼウス、生命(いのち)はぐくむヘラ、またアイドネウス。
そして死すべき人の子らのもとなる泉を、その涙によって潤すネスティス」
Zeus・・・火、Hera・・・空気、Aidoneus・・・土、Nestis・・・水

1080 Fr.8 「次に、私は他のことを語ろう。およそ死すべきものどもの何ものにも
本来の意味での誕生はなく、また呪うべき死の終末もない。
あるのはただ混合と、混合されたものの分離のみ。
〈誕生〉とはただ、人間たちがつけた名目にすぎぬ。」

1085 では、混合と分離を促すものは何か？

1090 Fr.17,6-8 「そしてこれら[四元]は永遠に交替し続けてやむことがない。
或るときには〈愛〉の力により、すべては結合して一つとなり、
或るときには〈争い〉のもつ憎しみのために、逆にそれぞれが離れ離れに
なりながら。」

以上のような仕方です、エンペドクレスはパルメニデスの根本原則を壊すことなく、
現象界のことを説明しようとした。

1095 Φιλία (Philia), Φιλότης (Philotes) 「愛」 …… μίξις (miksís) 混合
Νεῖκος (Neikos) 「争い」 …… διάλλαξις (diállaksis) 分離

4)宇宙の周期(cycle < κύκλος 円環)

1100 「愛」と「争い」という2つの力が、定められた周期に従って、交替して宇宙万有
を支配する。

Fr.17,1-13

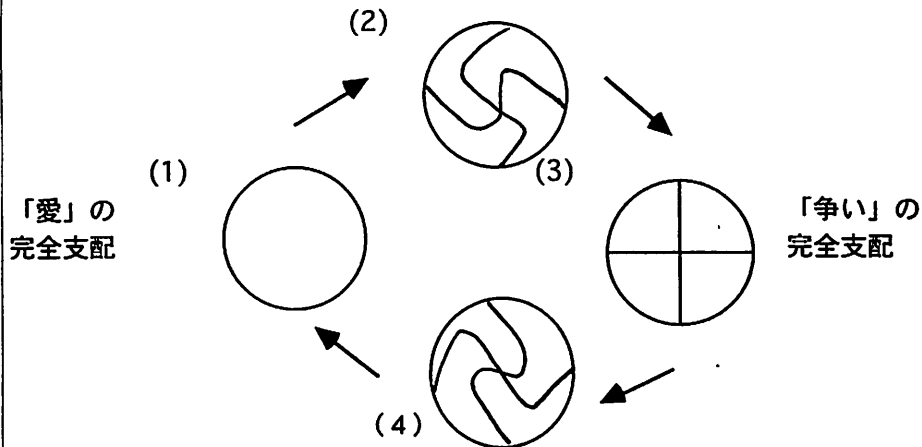
「ここにわが語るは二重のこと——すなわち、あるときには多なるものから成長し
てただ一つのものとなり、あるときには逆に一つのものから多くのものへと分裂し
た。死すべき者どもには、二重の生成と二重の分裂がある。

1105 すなわち、一方では、万物[四元]の結合が、或る種族を生んでまた滅ぼし、他

方では、別の種族が、ものみな【四元】の再び分離するにつれて、はぐくまれてはまた飛散する。

そしてこれら【四元】は永遠に交替し続けてやむことがない——

- あるときには「愛」の力により、すべては結合して一つとなり、
1110 あるときには「争い」のもつ憎しみのために、逆にそれぞれ離れ離れになりながら、
このように、多なるものから一なるものになるのを慣いとし、
また逆に一なるものが分かれて多となる限りは、
その限りでは、それらは生成しつつあるのであって、永続する生をもってはいない。
しかしそれらが永遠にやむことなく交替し続ける限りでは、
1115 その限りでは、それら円環（周期）をなしつつ常に不動のものとしてある。」



- 1130 (1)「愛」の完全支配：万物が渾然一体となりきって、相異なった個々の事物の形成はありえない。
(2)「愛」の完全支配から「争い」への移行期
(3)「争い」の完全支配（これに関するまとまった断片はない）
(4)「愛」の支配が再びやってくる。

- 1135 「愛」の完全支配⇄「争い」の完全支配という過程のうち、現に我々のいる世界はどの時期にあるか、という問題については、諸説あるが、アリストテレス（『生成消滅論』334a）をはじめ、古代の証言では、「争い」の支配が増してくる時期にある、とされている。従って、(1)→(2)→(3)のうち、両端の(1)
1140 (3)を除く、どこか、ということになる。

4')生物発生の四段階（略）

5)アナンケー（ἀνάγκη(anagke):必然）の宣告——『カタルモイ』

- 1145 Fr.115「ここに必然【運命】の女神アナンケーの宣告がある。それは神々の決議いたしました太古の掟。

- としえに力をもち、大いなる誓いによって封されてあるもの。
すなわちいわく、永生の命を分け与えられたダイモーンたちの中に、
1150 過ちを犯してみずからの手を殺生の血に汚した者あれば、
さらにまた争いに従って、いつわりの誓いを誓った者があれば、

それらの者は至福の者たちのもとを追われて、一万周期の三倍をさまよわねばならぬ。

1155 その間を通じ、死すべきものどものありとあらゆる姿に生まれ変わり、
苦しみ多き生の道を、つぎつぎととりかえながら――。

すなわち空気 [アイテール] の力は彼らを大海へと追いやり、
大海は彼らを大地の面 (おもて) へと吐き出し、大地はかがやく太陽の
光の中へ、そして太陽は空気の渦巻きの中へと彼らを投げ込む。

1160 それぞれのものが彼らを他から受け取り、しかしすべてが彼らを忌み嫌う。
われもまたいまは、かかる者らのひとり、神のみもとより追われてさまよえる者、
ああ、荒れ狂う<争い>を信じたばかりに――。」

Justin
魂はもともと神的なもの (ダイモン) であったが、ある種の原因をなして至福の
1165 者たちの中から追われ、死すべきものの中にやどり、罪をつくなうために転生を
繰り返す。もし罪をつくなうなら、生成の円環 (κύκλος: kyklos) からのがれて、神
のもとに帰る。「上から来たことと、下にあることの感情 (Gefühl)」 (Jaeger)

6) 2つのキュクロス (κύκλος) の相関

1170 自然学的側面 (『自然について (ペリ・ピュセオース)』) と宗教的側面 (『浄め
(カタルモイ)』) が決して無関係ではない、ということは少なくとも推測できる。

<残された問題>

1175 『浄め (カタルモイ)』において語られる「私 ego」あるいは私の「魂」とは、何
であるか？

4-2 Anaxagoras (Ἀναξαγόρας ὁ Κλαζομένιος)

1180 「現象は、見えざるものが示す兆 (しるし) である」 (Fr.21a)

1) 年代と人物

Diog.Laert. II, 7.

1185 生年 第70回のオリンピア祭 (500/499 B.C.), クラゾメナイ (イオニア)
20才 アテナイに出て哲学の勉強 (30年間)

ペリクレスと親交をもつ

後に (おそらくはペリクレスの政敵から) 不敬罪で告訴され、晩年はギ
リシア北部のランプサコスに退いて生涯を終えた。

死 428/427 B.C. (71歳)

1190 書物は一冊しか書かなかったと言われ (現在20あまりの断片が伝わってい
る), ソクラテスも若いころ、熱心に読んだという。

Platon, Apol.Soc. 26E 1 ドラクマで買えるもの (あまり高くないもの)

1195 アテナイ滞在中 (468/467 B.C.) アイゴスポタモスという地に、隕石が落下して
きたのを調べ、太陽は灼熱した鉱塊 (簡単に言えば、石) であり、月は土からなり、

それ自身は光を発しないと云った。

1200 客観的な研究——もともとギリシアの自然学は実証的であった。
(当時、太陽の神格化がなされていた)

エンペドクレスのような情熱的な人物とは対照的な冷静な人物。

1205 2) アナクサゴラスの哲学を形成している基本的動因

・我々に対して現われてくる現象をもとにして、その背後にあるものへと迫ろうとする態度。

・彼の学説は、生理学上の学説と密接に結び付いている（シンプリキオスが特に強調している点）。

1210 ・彼はイオニアの伝統のもとで育った。

アナクサゴラスの宇宙形成論は、アナクシマンドロスのそれとある意味でよく似ている。

・エレア派の影響

アナクサゴラスもまた、エンペドクレスと同様に、パルメニデスの根本格律を守って、絶対的な意味での生成と消滅を否定する。

1215

Fr.17 「いかなるものも生じもせず、滅びもしないのであって、むしろ、在るところのものが基になって、そこから混合と分離が行なわれるのである」

1220 ・Zenonの問題

Fr.3 「小さいものには、これ以上小さくならないという限界はなく、つねに、より小さなものがある。なぜなら、「在る」ものが「存る」ことをやめるということは不可能だから」

1225 無限分割の可能性

Τὸ εὖν οὐκ ἔστι τὸ μὴ οὐκ εἶναι
(to eon ouk esti to me ouk einai)

(τομή: 分割によって、という読み方もある)

1230 「存るものが存ることをやめることは不可能だ」

～が存る → 量的観点からの無限分割の可能性

～である → 質的観点からの無限分割の可能性

両方の観点を含む

1235 或る特定の性質をもったものをいくら分割していても、そのものであることをやめることはない。

Fr.10 「どうして髪でないものから髪が生じたり、肉でないものから肉が生じたりすることがありえようか」

1240

→ 同質素 ὁμοιομερῆ (homoiomere: 後代の人言葉、特にアリストテレス)

ὁμοιομερεῖα (homoiomereia)

彼の生理学的関心と結び付く

1245 「我々が、パンや水といった単純な食物を摂取したとすると、これによって髪や静脈や動脈、肉、筋肉、骨その他のものがつくられる」ということから、「その食物の中に、血や肉や骨やその他のものをつくりだしたなんらかの部分があるにちがいない」

けれども、たとえば肉は、どこまで分割しても肉であるのではないか？ どうして肉が肉でない骨や血になるのか。 [Fr.10]

→「すべての部分がすべてのうちにある」 [Fr.11]→アポリアー（難問）

1255 万物のアルケー（原理）・・・同質素（数においても小ささにおいても無限）としての「スペルマタ」σπέρματα(spermata)[Fr.1]

このスペルマタの混合と分離によって、すべての「クレーマタ(物)」(χρήματα, chremata)の秩序が生じる。

1260 混合と分離の原因となるのは、「ヌース（知性、理性）」(νοῦς, nous)である。「ヌース」は、「スペルマタ」の海に衝撃を与える。するとその衝撃は渦動運動を生じ、その連鎖反応によって、次第に現在我々が見るような世界秩序が生まれてきた。 [Fr.12]

1265 5. 原子論(1)

L.=Leukippos(Leucippus) Λεύκιππος ὁ Μιλήσιος

D.=Demokritos(Democritus) Δημόκριτος ὁ Ἀβδηρίτης

1270 L. Fr.2

「いかなるものも、いわれなしには生じない。全てはロゴスと必然からの帰結である」

D. Fr.9

「甘いといい、辛いといい、熱いといい、冷たいといい、また、色といい、全てみなノモス

1275 (νόμος, nomos)の上のことに過ぎない。真実には、アトムと空虚あるのみ」

ノモス：人為的な約束、習慣事

この2人によって書かれた台本を守り、細かな点を埋めていったのが近代自然科学(19C末までの)とも言える。

1280

両者はほとんど対にして語られる。わずかにアリストテレスは、若干の資料で両者を別々に語る時には、L.が原子論の創始者で、D.が完成者とされる。

L.に関しては、ほとんど資料がなく、出生地、年代もあやふやである。

1285 Diog.Laert.IX,6.30. 「レウキッポスは、エレアの人。しかしある人達は、アブデラの人であると言っているし、また別の人達によれば、ミレトスの人だということまで

ある。この人は、(エレアの)ゼノンの弟子であった。」

D.はアナクサゴラスの青年時代、年少であり、アナクサゴラスより40歳年少である。

1290 D.の生年は、前470年頃で、ソクラテス(前469~399)と同時代。

D. 旅行家(エジプトをはじめ各地を広く見聞して歩いたらしい。df.Fr.299?)

著作も多い。多方面にわたっている(倫理学、自然学、数学、音楽、技術など)。

1295 D.の著作は、1世紀のトラシュロスによって分類され、13部門(1部門に4篇)と部門外の9篇を加えて、合計61篇にのぼるとされる(DK68A33)。学問における「五種競技選手 πεντάθλος」(=万能選手, pentathlos)と呼ばれたD.にふさわしい。

『快活について』『大宇宙』『小宇宙』などの書名が伝えられる。散文ながら、躍動感のある詩的な文体(キケロ, DK68A34)。

五種競技(pentathlon): Diskuswurf, Sprung, Speerwurf, Laufen und Ringen.

1300



今日まで残っているのは、「倫理学」的著作からの断片がほとんどで、自然学的な著作からの断片は少ない。

→ p. 32, l. 1436

思想

1305

1) 「虚と実」

2) 「不可分なもの」

3) 「原子論的世界像」

エレア派に対応して、自然学的考察を行なう。メリッソスの影響。

1310

メリッソス, Fr.8 「もし存在が多であったならば、それらの多の存在は、ちょうど、私が一者がそれであると主張するような、まさにそのような性格のものでなければならぬだろう。」

<1> 存在の一つ一つが恒久不変。

<2> 虚の否定 → 運動の否定。

1315

メリッソス, Fr.9 「あるものがあるとすれば、それは一としてあるものでなければならぬ。他方、もしそれが一であるならば、それは身体(物体)をもたないことが必然である。だが、それが厚さをもつならば、部分をもつことになるだろう。そしてそれはもはや一ではないだろう。」

1320

1) 「虚と実」

1. 存るものと存らぬものを徹底的に峻別する。

2. 空虚は何物でもないもの、存らぬもの。存るものは、完全に充実している。

3. もし、空虚が存在しなければ、動は存在しない。何故なら、ものが動く余地がない。また、多もありえない。何故なら、ものどものを分け隔てる間隔がないから。

1325

・しかし、現象的事実としては、動があること、ものが多数あることは疑いえない。

では、上記の3つのエレア派の要請にどのように対処するか？

1330

資料: Arist. *De generatione et corruptione*, A 8 325a23~: *Metaphysica*, A 4, 985b4~

1. 2. → 3. の推論は正しい. / 2. を衝く

1335

<エレア派の要請>		<現象的事実>
存るもの(ὄν)	= 実	物 (σῶμα) . . . ある (存在する)
存らぬもの(μὴ ὄν)	= 虚	非物質 ある (存在する)

1340

存らぬものも、存るものに少しも劣らず存ると主張する。何故なら、虚も物体に少しも劣らず存るから。

L. (DK67A8: Simplicius, *In Phys.*, 28.4~) 「あらぬものは、あるものに少しも劣らずある」

空虚を容認することによって、動と多を救う。

1345

2) 「不可分なもの」

cf. ゼノンの無限分割の可能性、不可能性の問題。

ピュタゴラス派は、数の単位、幾何学的な点、現実の物の構成要素をはっきりと区別していなかった。ゼノンは、この点を衝いた (Anaxagorasは、事物の無限分割の可能性を認めた。Fr.3)

1350

D. は、数学上の事柄と、現実の事柄を区別する。

数学上、思考上の事柄は、無限に分割可能であるが、現実のものは無限に分割できない。

1355

それ以上分けられないもの・究極の限界——原子

原子 τὰ ἄτομα [σώματα, μεγέθη]

αἱ ἄτομοι [φύσεις, οὐσίαι]

5. 原子論(2)

1360

3) 「原子論的世界像」

世界は、原子と空虚から成り立っている。

原子の一つ一つはパルメニデスが、真実在に対して与えた性格をもっている。

唯、形と大きさの違いだけは与えらる。形と大きさの違いは無限にある。アトム (原子) そのものの種類は無限。

1365

感覚に直接示される第二性質はもっていない。 ἄποια (aporia)

感覚的な性質 . . . 多くのアトム (原子) が集合体を形作る。

形 (σχῆμα, ῥυθμός) AN

位置 (向き) . (θέσις, τροφή) ZN

1370

配列 (τάξις, διαθιγή) AN NA

見かけ上の性質の違いが現われる。

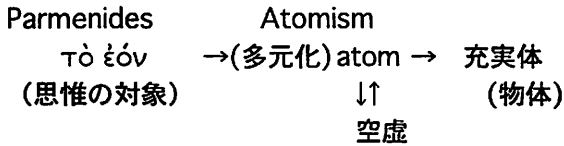
アルファベットの字母は同じでも、そこから喜劇も作られるし、悲劇も作られる。

一切の感覚的性質を世界の実在的基礎から追放してしまう。

1375

実在としての原子を基礎にして、感覚的性質を説明する。

1. たてまえの問題



純粹に思惟の対象（感覚されないもの）が空虚と対立させられることによって物体となってゆく。 → 矛盾

Fr.11

- ・真正の認識 → atom (γνησίη γνώσις)
 - ・暗い認識・・・五感（視覚, 聴覚, 味覚, 触覚等）によって認識される (σκοτίη γνώσις)
- 真正の認識は非常に小さいので我々の感覚を逃れる。

- ・「感覚によってとらえられない」ということの意味が違う。純粹の思惟の対象だから（本来の意味）非常に小さいから（原理的には感覚できる）

物体・・・ἄπτόν 可触
ὄρατόν 可視

- ・シュレディンガー
もしデモクリトスが現代に生まれ、アトムが感覚されることを知れば、躍り上がって喜ぶだろう。

→ 逆に当惑するのではないか。
感覚によってとらえられるはずのないものが感覚によってとらえられた...

2. 認識論プロパーの問題が顕在化

原子の一つ一つが感覚的性質を一切もっていない。
感覚的性質はわれわれの側に属する受動的状態の名称に過ぎない。
(Sextus Empiricus, Adv.Math. VII 184)

主観的表象と客観的表象の区別（近代哲学）と重なる。
しかし、形と大きさだけはもっている。
→ 第一性質と第二性質の区別と同じ。

? → 第二性質
causal theory of perception

16,17世紀の近代自然科学の成立

目に見える現象の基礎に、現象を構成する基体がある。

ものの形で状況をとらえる・・・巨視的

人間の生存と行動

cf. プラトン

1425 あるレベルまでは粒子（構成要素）による説明の仕方を受け入れるが、それが世界の真の實在の在り方ではない。

存在と価値の分離

事実と価値の分離

1430

世界の在り方と人間の生き方を一体的にとらえるのが本当の認識であるとするれば、デモクリトスは、認識の方向を特定化、特殊化したといえる。

→ 倫理学との間に深い溝ができた。

1435

すでに述べたように（^{1997.12.9.配布}），デモクリトスの断片として今日まで残っているのは、「倫理学」的著作からの断片がほとんどで、自然学的な著作からの断片は少ないという事実がある。このことはデモクリトスが関心をもって量的に多くの発言をした分野が（我々の分類でいうところの）倫理学的分野（価値、人間の生き方の問題）だったということを示唆しているかもしれない。

1440

原子論と倫理学的分野（価値、人間の生き方の問題）の関係については、単に、倫理学との関係だけでなく、宇宙生成の問題もふくめて、デモクリトスの「魂」論と、（古代後期のエピクロス、ルクレティウスらの）その後の原子論の発展と修正の跡を追跡調査してみなければならない。

1445

5. 原子論(3)

3) 「原子論的世界像」 (続き)

・デモクリトスの「魂」論

1450

・デモクリトスの宇宙論と人間、教育（ディダケー）の可能性

・デモクリトスの「魂」論

「魂」は、それを構成する原子から成り立つ。それらの原子は小さく、球形で、動きやすい。

1455

「魂」を構成する原子群塊は、その他の原子群塊よりもはるかに動きやすい。

(A104)

「魂」は、身体・物体を動かすもの、生命を与えるものである。(A10, A106)

1460

Fr.159（魂には行為の責任がある）「・・・すなわち魂は、あるときには身体の世話を顧みないことによって身体を滅ぼし、酪酊させることによって懦弱にし、あるときには、快楽を追求させることによって身体を破壊し、ばらばらに引き裂いてしまうから」

1465

Fr.33「素質（ピュシス）と教育（ディダケー）は似ている。なぜなら、教育は人間を再形成し（メタリュシモイ）、再形成することによって素質をつくりだすからである」

1470 人間の素質としての魂は、生成したときのままに固定されているわけではない。教育（ディダケー）は、素質を再形成することによって、魂の在り方をよりよいものにする事ができる、というのがDの考え方であるといえる。

→ しかし、宇宙・自然にはたらく原理（必然）が、「小宇宙（マイクロ・コスモス）としての人間」にも、例外なく、はたらくならば、教育（ディダケー）によって、魂の在り方をよりよいものにする事も、その宇宙・自然にはたらく原理（必然）の範囲内で規定されているのか、それとも、魂を構成する原子の場合は、例外で、教育を行ない、教育を受ける人間の意志や主体性を認めることができるのか？という問題が残る。この点は、後にアリストテレスの批判を経て、それに対応する形で、エピクロスやレクレティウスの原子論において、問題として意識されることになる。

1480 6. ソフィスト、ソクラテス、プラトン

1. ソフィストたち
2. ソクラテス
- (3. 小ソクラテス学派)
4. プラトン

1485

6-1. ソフィストたち

1-0. 前5世紀半ば、アテナイを中心とした、"sophistes (ソピステース)" を自称する人々の活動。

プロタゴラス (前490頃-420頃, アブデラ出身)

1490 ゴルギアス (前500頃-390頃あるいは前480頃-375頃, レオンティノイ出身)

弟子に、イソクラテス (前436-338)

プロディコス (詳細不詳, 前431(421)にアテナイへ, ケオス出身)

ヒッピアス (前5世紀後半, エリス出身)

...

1495

1-1. 名前の由来

σοφιστής (sophistês)

σοφίζω (sophizô)

σοφία (sophiâ)

σοφός (sophos)

1500

sophist

意味の曖昧さ, 両義性

--- A

1505

・アイスキュロス『プロメテウス』(1.62): プロメテウスはsophistesと呼ばれる。

・ヘロドトスは、七賢人の一人ソロンを(1;29), 哲学者ピュタゴラスを(4;95)をsophistesと呼ぶ。

1510

・クセノポン(*Memorabilia*, 1.1.11)とイソクラテス(*Antidosis*, 268)は、自然哲学者をsophistesと呼ぶ。

・プラトンは、冥府の神ハデスを(*Cratylus*, 403E), 数学者を(*Meno*, 85B)sophistesと呼ぶ。

1515

--- B

・プラトン(*Sophistes*によるsophistesのまとめ) <sophistesは金持ちの青年を獲物にして金儲けをする者であり, 精神の糧である学問・知識を卸売したり, 小売したり, 自家製造する商人であるが, その学問・知識は, 見せかけだけの偽物であって, 彼らは自分自身がよく理解していない事柄の模造品を取り扱っているのに, あたかも自分自身がよく理解しているかのように偽り装う者である>

1520

・偽クセノポン(*Cynegeticus*, 13.8) 「sophistesというものは, 人を欺くために語り, 自己の利益のために書くのみで, 何人をも少しも益することがない. 彼らには真の知者は一人もいないのであり, sophistesと呼ばれることは心ある人々にとってはまさに恥である」

1525

・アリストテレス(*De sophisticis elenchis*, 165a21) 「実際に存在しない見せかけの知識で金儲けするのがsophistesの業である」

1530

・アリストテレス(46論説, *Dindorf*, II. 407) <sophistesという名前は本来philosophosと共通であり, けっして悪名ではなかったが, プラトンがこれを主として悪い意味に用いた>/<イソクラテスは, philosophosという言葉を自分や自分の仲間について用い, ディアレクティケー(問答法, いわゆる弁証法)を云々する連中をsophistesと呼んだ>/<リュシ阿斯(前458頃-380)がプラトンをsophistesと呼んだが, 非難の意味があるかもしれない>

1535

・ピロストラトス(『ソフィスト伝』序論) <昔のsophistesとphilosophosとは方法を異にするだけで, その取り扱う問題は同じである>

1540

--- C

・イソクラテス(『ソフィストを難ず』) <低級な法廷弁論の教師と, 人生何をなすべきかという知識を授けると称して, 実際は空虚な論理を弄ぶ連中を非難>/<(Antidosis, 266, 270) <ある人々によってphilosophiaと呼ばれているものは真の哲学ではなく, 自分が教える実際の知見や教養こそがそれである>/<(Ad Philippum, 12-13) 「役にも立たない法律篇や国家篇を書いたソフィストたち」/<(Panathenaius, 18) 「何でも知ったかぶりをする俗流ソフィストたち」//<(Antidosis, 220) <自分をソフィストと認める>

1545

1550 まとめ

--- A sophistes 「知恵をもつ者」「知恵をはたらかせる者」よい意味. 本来の意味.

--- B sophistes 「見せかけだけの偽物の知恵を教える者」わるい意味で, 非難をこめて使われる.

1555

--- C 非難の対象としてのsophistesと本来の意味で, 自らを呼ぶ場合が同一人物(イソクラテス)にある.

<参考書の紹介>

- 1560 1) 内山勝利／中川純男編著『西洋哲学史〔古代中世編〕フィロソフィアの源流と伝統』ミネルヴァ書房, ISBN4-623-02663-9
 2) F.M.コーンフォード／山田道夫訳『ソクラテス以前以後』岩波文庫.
 3) プラトン／藤澤令夫訳『プロタゴラス』岩波文庫.

ここまでのProtokoll

- 1565 1.ソフィストたち
 1-2-1. 社会状況
 ・前5世紀半ば, アテナイにおける民主主義(デーモクラティアー).
 ・デロス同盟の中心(アテナイ)へ周辺の同盟国(小国)からソフィストたちが来る.
- 1570 1-2-2. プロタゴラス「人間は万物の尺度」
 ・『真理論(または打倒論法)』と呼ばれる著作の冒頭
 ・エレアの Parmenides の「真理(アレーティア)」と「思惑(ドクサ)」の分離, 「理性(ノオス, ノース)」と「(日常的)感覚(アイステーシス)」の分離
 1575 に対するアンチテーゼとしての, 一種の人間中心主義(そして相対主義).
 ・プロタゴラス「徳(アレテー)の教師」. 「徳(arete, アレテー)」は, 本来, 「優秀さ, 卓越性」を意味するが, 民主主義(デーモクラティアー)制下のアテナイにおける政治的能力を意味する(具体的には, 弁論的能力).
- 1580 1-2-3. ノモス(人為的制度)とピュシス(自然本性, 自然の法則)
 アンティポン Antiphon (前5世紀末)の正義否定論「・・・つまり正義とは, 自分が住んでいる国の決まり(ノモス)を犯さない, ということである. 従って, 人は, 目撃者(証人)のいるところでは, 法(ノモス)を大いに尊重し, 目撃者のいない自分ひとりだけの場では, 自然(ピュシス)の掟を尊重するようにすれば, 正義を最も自分のためになるように活用することになるだろう. というのは, 法(ノモス)の上の事柄は後から恣意的に決められたものであるが, 自然(ピュシス)的な事柄は変更できない必然的なものだから・・・」(DK, Fr.44)

人物(と著作)

- 1590 1-3-1. プロタゴラス(前490頃-420頃, アブデラ出身)の場合
 「プロメテウス=ゼウス神話」[プラトン『プロタゴラス』320D sqq.]
 → 人間は, 自然的能力においては, 他の生物に比べて全く無力であるが, プロメテウスからもたらされた技術知(人間の衣食住に関する知恵)に加えて, ゼウスから「つつしみ(aidos, アイドース)といましめ(dike, ディケー)」を与えられたこと
 1595 によって, 生存の基礎を得た.
 ・ノモスのピュシスに対する優位
 人間は, プロメテウスからもたらされた衣食住に関する技術知だけでは, 団結して事にあたることができず, 他の動物のために滅ぼされるところであったが, ゼウスの贈り物である「つつしみといましめ」によって, 国家社会を形成して, 今日に至った. 従って, 法律その他の手段によって, 「徳(アレテー)」を教えられている国家社会の一員は, たとえ極悪の者であっても, 法律も道徳も知らない野性の人よりは, 優れている, という主張.
 ・これが100%プロタゴラスの説かどうかは問題がある(プラトンによるプロタゴラス).

1605 ・ゼウスからの贈り物（「つつしみといましめ」）が万人に分け与えられた、という点は重要（民主主義（デーモクラティア）制の理念を支える）。

<ノモス（法）の発生に関する説～その後>

1610 ・クリティアス(前460-404/3)

「昔、人間の生活には秩序がなく、動物のように、強い力だけに従う時代があったが、その時には、善い人が報いられる賞もなかったし、悪い人の懲らしめもなかった。人間が法律を懲らしめのために定めたのは、それから後のことだったと、私は思う。それは、正義のいましめが権力をもち、不法は誰のものでも束縛するためであった」(Fr.25)

→法律は人間が作ったもので、ゼウスからの贈り物ではない。

・カリクレス（プラトン『ゴルギアス』482C, 登場人物）

法律以前の無秩序状態を自然の正義として賛美する。

1620 「法律はあからさまな暴力を妨げたが、人々はひそかにこれを行っていた。そこではじめて誰か利口な思いつきのよい人が、人間たちのために神々を畏れることを発明したように思われる」

→何でも見ている神が、人間のひそかな考えや行ないを見張っているという話を虚偽であると断じる。（→アンティポン以上に、徹底的に世俗的道德を破壊する）

1625

以上は、プロタゴラスの教育理念を支える前提（・ゼウスからの贈り物（「つつしみといましめ」）が万人に分け与えられたこと）を崩してしまう。

問題：法律以前の「自然状態」をどう考えるか？

1630

1-2-4. ノモス（人為）とピュシス（自然本性）～徳育

「徳そのものの教師（プロタゴラス）」から「弁論術の教師（ゴルギアス）」へ作者不詳『両論（Dialexeis, Dissoi Logoi）』の視点

1635

・プロタゴラスは自らを「ソピステース（ソフィスト）＝徳（アレテー）の教師」と称したが、その「徳（arete, アレテー）」とは（本来、「優秀さ、卓越性」を意味するが）民主主義（デーモクラティア）制下のアテナイにおいては、政治的能力を意味し（具体的には、弁論の能力）、それを学んで身につけることができれば、優れた指導者となることができるはずのものであった。

1640

・プロタゴラスらソフィストがアテナイに登場したとき、事実として、次のような問題があった。

1645 アテナイにおいて優れた指導者であったテミストクレス、アリストイデス、ペリクレス、トゥキュディデスらは、自分の子弟の教育に決して熱心でなかったわけではなく、教育することが可能だと思われるあらゆる事柄を子供たちに教えた。しかし、彼らの子弟は馬術やレスリングは上達したが、テミストクレスやペリクレスらが、万人に卓越していた当の事柄に関しては何も学ぶことができなかった。もし、優れた指導者を優れた指導者たらしめる当の事柄が、学ぶことができるならば、この事実は何を意味するのか？

1650 （政治に関する事柄と、政治以外の専門的技術とでは何か違いがあるのか？）

1-2-5. 作者不詳『両論 (Dialexeis, Dissoi Logoi)』(16世紀の古典学者 H.Stephanusが, Dialexeisと命名. ドリス系方言, ペロポネソス戦争集結以後の頃, 前400年前後)

1655

1.善と悪について/2.美と醜について/3.正と不正について/4.真と偽について/5./6.知恵と徳が教えられるかどうかについて/7./8./9.

6.知恵と徳が教えられるかどうかについて~5つの論点を挙げ, 論駁を試みる.

1660

(1)もし人がそれを他人に伝授するならば, もはや伝授されたものを自分でもっていることはできないであろう.

(2)もし教えられるものならば, 音楽の場合と同様に, それを教える者を指摘することができるであろう.

1665

(3)もし教えられるものならば, ギリシアに生まれた知恵・徳の優れた人々は, 自分の技能をその息子たちに教えたはずである.

(4)すでにある人々は教師(ソフィスト)たちのもとに赴いたが, 何ら得るところがなかった.

(5)ソフィストたちと交わらなくても, 相当な人物になった人たちがたくさんある.

1670

(1)は, 論理的問題として排除.

(2)については, ソフィストを指摘できる.

(3)ポリュクレイトスは息子に彫刻の技術を教えたことが証拠になる.

(4)文字の場合でさえ, 学んだのに知らないひとがいる.

(5)生まれつきの素質も無視できない.

1675

cf. プラトンの著作の内容との関連・・・(1)は, プラトンには見出しされない。(2)~(5)は, 『メノン』89C-96Dに内容的に対応。(3)は, 『プロタゴラス』第10章と同じ論点。ただし, 後にソクラテス・プラトンの扱い方には全く違う論点もあるので注意を要する。

1680

『両論』の著者のまとめの言葉・・・「私が言おうとするのは, 徳が教えられるという主張ではない。ただ, 以上において述べられた徳は教えられないという証明が私を満足させないということである」

1685

→「徳が教えられるかどうか」は, 「徳の教師」を自称するソフィストにとっては死活問題であった。そこで, プラトンの『プロタゴラス』320D-328Dでは, 「徳が教えられる」ことが積極的に主張され, 前回みた「プロメテウス=ゼウス神話」が語られる。これは万人が「教育」を受けることのできる可能性を確保する。

1690

・他方, プロタゴラス自身の言葉としては, 「教育には素質と練習が必要であり」「学習は幼いうちに始めなければならない」(Fr.3)というものがある。これは, 『両論』の(3)~(5)への対応として意味がある。

1695

→『両論』の場合も, またこれ以前のギリシアの伝統からみても(「自ら全てを覚る者こそ最上, されどまた人の忠言に従う者もよし」(Hesiodus, Opera et dies, 293, 295), 「第一によきものは素質(ピュシス), 第二は学習(マンタネイン:manthanein)」(Epicharmus, Fr.40)), まず, 「素質(ピュシス)」が重要で, 学習はそれにつぐものであったが, プロタゴラスの「学習は幼いうちに始めなければならない」という言葉は, 学習を重視した発言である, と言わなければならない。

cf. プロタゴラス自身の言葉(練習や訓練の重要性を示唆するもの)

「技術も練習がなければ無である。練習も技術がなければ無である」(Fr.10)

1700 「教養が精神のうちに芽をふくためには、ずっと深いところまで行かねばならぬ」
(Fr.11)

・「素質（ピュシス）」に対して「学習（マンタネイン:manthanein）」というときの「学習」の内実は何か？

1705

→プラトンやクセノポンの伝えるソフィストの教育

・プラトン『ヒッピアス大』(Hippias Maior, 286A-B)によれば、ヒッピアスは、青年の心がけるべき事柄についてひとつの美しい文章を書き、それをスパルタやアテナイで講演して名声を博した、という。

1710

・クセノポン『ソクラテス追想記』2,1(21-34)には、青年に対して「徳のすすめ」を説くプロディオスの『青年ヘラクレス』の一部分が保存されている。これによって見ると、内容・形式ともにギリシア人の伝統的なものであり、特に目新しい点はない（強いて言えば、韻文を散文にした点が新しいかもしれない）。

1715

→自分の教えるものは「弁論術」だけであることを認めるソフィスト、ゴルギアスが登場する。

----- 「徳」の教師から「弁論術」の教師へ

2-1-1. 「弁論術」の教師、ゴルギアス

1720

ゴルギアス（前500頃-390頃あるいは前480頃-375頃、レオンティノイ出身）

弟子に、イソクラテス（前436-338）がいるが、イソクラテス自身は、弁論家とみなされ、ソフィストとはみなされない。

資料：プラトン『ゴルギアス』など

プラトン『メノン』95C

1725

<ソフィストは「徳」の教師であるより、むしろ「弁論術」の教師である。自分（ゴルギアス）はこの点を正直に認める。自分の教えるのは、結局のところ弁論術だけであり、徳を教えるというようなことは約束もしないし、そのような約束をする人を嘲笑する。>

----- ちょっと脱線

Democritus: 「説得は金より強い」 ⇔ Euripides, Medea: 「金の方が説得より強力」

1730

弁論術と「説得」～「説得（ペイトー, peitho）」の種類

A) 「ことば以外のものによる」説得→贈与, 贈収賄

B) 「ことばによる」説得=通常考えられる弁論術による説得

前5世紀のアテナイにおける3人の人物

1) Miltiades: 贈与を市民に約束して軍隊の派遣を国民議会で可決。

1735

どこへ派遣するかも言わず「黙って俺についてこい！」

失敗して罰金を課され、払い終わらないうちに没する。・・・A)

2) Kimon(Miltiadesの息子): 日常的に自分の邸宅を貧民に開放、喜捨等によって一般市民の人気を得る。・・・A)

3) Perikles: 贈与に対して、倫理的に厳格。金銭に潔癖。

1740

贈与を犯罪とみなす。・・・B)

A), B) 2つのタイプの「説得」は常に存在するが、当初は、A)も公に行なわれていた(厳密に言うとA)+B)が同時に公に行なわれていた)。Periklesの登場によってA)は水面下に隠れ、「説得」というもっぱら「ことば(のみ)による説得」(すなわちB))を指すようになった。

このB)の意味での「説得」を主な任務とするのが、ゴルギアスの弁論術である。

1745

2-1-2. ゴルギアスの「弁論術」

・ゴルギアス(をはじめ、「弁論術」を教えたソフィストたち)は、ギリシア、ローマの弁論術の受けてこれを集大成したクインティリアヌス(c.35-95 AD)に至る弁論家の系列の中では傍流である。

- 1750 ・通常の弁論家とソフィストを区別する特徴は何か？
→プラトンによるゴルギアスの発言
＜弁論術は人生の最高最善のものを生み出す技術であり、人はこれによって自分自身の自由を確保するとともに、自分の住んでいるポリスにおいて他人を自分のために支配することができる＞（プラトン『ゴルギアス』451D, 452D-E)
- 1755 ＜説得の技術はあらゆる技術よりもはるかに勝るものであって、それは強制によらないで、すべてのものを自発的に自己の下に隷属させる＞（プラトン『ピレポス』58A-B)
＜他の学術を知らなくても、これだけひとつ心得ておけば、他の専門家に負けることは決して無い＞（プラトン『ゴルギアス』459C)
- 1760 ＜たへん重宝である＞（プラトン『ゴルギアス』459C)
・ゴルギアス『ヘレネ論』
・ゴルギアスが教えると約束するもの（＝弁論術）は、ただその弁論の技能という人間的な力量によって、国家における支配的地位を獲得させてくれる。
→これはまた、その内容からみて、人間として、また国家社会の一員として優れた者をつくる
- 1765 「徳」の伝授という含みをもつ。
・その後の散文の文体に影響を及ぼす（イソクラテス、プラトン）。
・ゴルギアスの教授法：手本となる弁論を与え、これを暗記させるというやり方。
これに対するアリストテレスの批判＜靴の作り方を教えないで、出来上がった靴ばかりいろいろと見せるようなものだ＞（アリストテレス『詭弁論駁論』34, 183b36)
- 1770 ---
アリストテレス『弁論術』3, 18, 1419b3
「真面目な厳肅さはその反対の笑いによって、笑いは真面目に応じることによって崩す、べきだとゴルギアスは言ったが、的を射ている」
- 1775 3-1-1. その他のソフィストたち(1)
プロディコス（詳細不詳、前431(421)にアテナイへ、ケオス出身）
・弁論術における言葉の正しい使い方を重視。類義語の厳格な分類。
・政治家としても活躍。
[Aristoteles, *Topica*, B6, 112b22~]
- 1780 「さらにまた、名前が異なっているが故に、対象自身も自らに付帯する性質において異なっていると看做す人々がいた。例えば、プロディコスが諸々の「快楽(hedone)」を「喜び(chara)」, 「悦び(trepis)」, および「歓び(euphrosune)」の3つに分類していたように。これらはすべて快楽という同じ一つのものにつけられた名前なのだ」
- 1785 3-1-2. その他のソフィストたち(2)
ヒッピ阿斯（前5世紀後半、エリス出身）
・博学、万能。自然学、数学、天文学に通じる。記憶術。
・外交使節を勤める。
[Philostratus, *Vitae Sophistarum*, 1,11,1 sqq.]
- 1790 「ソフィストでエリスの人ヒッピ阿斯は、老年になっても、一度に50もの名前を聞いて、それらを聞いた順に暗誦できるほど記憶力がたくましかった。他方彼は、幾何学、天文学、音楽、韻律を議論に導入した」
- 6-2. ソクラテス
- 1795 6-2-0 従来の「ソクラテス」像への疑問
→この講義の序説(p.2, ll.61ff.)で示したようなギリシア哲学史の教科書的説明は、Aristoteles, *Metaphysica*, A(『形而上学』第1巻)の解釈によるものである。
- 1800 →タレス以来の「自然」研究(自然哲学)の伝統とは別に、ソフィストの登場によって、「人間」の問題(「ノモス」と「ピュシス」の問題)が哲学のテーマとなり、

1805 中でも、人間の「徳」とは何か？ という問題をソクラテスが受け継いで発展させた。従って、ソクラテスにおいて、哲学の考察課題は、「自然」から「人間（の徳）」の問題になった。（その後、プラトン、アリストテレスになって、再び、「自然」と「人間（の徳）」の問題が総合的に扱われるようになった）

↑

上述の教科書的説明は、どこまで本当であると言えるだろうか？

6-2-1 歴史上の事実をどこまで知ることができるか？

1810 →「ソクラテス」を知るための資料の問題

・ソクラテスは1冊も書物を残していない。

・ソクラテスと直接の交渉をもった人々がソクラテスについて書き残したものを資料とせざるを得ない。

1815 ・ソクラテスと直接の交渉をもたなかった人々のソクラテスについての言及は伝聞によるので、間接的証言である。（cf. アリストテレス: 前 384-322）

・ソクラテスと直接の交渉をもった人々の証言であっても、著者の創作があってもならずとも歴史上のソクラテスの言動をそのまま再現しているとは限らない。

1820 （かつてのBurnet-Taylor 説くプラトンの描くソクラテスをそのまま歴史上のソクラテスとみなす）は、もはや支持されず、現在では「ソクラテス問題」という名称のもとに、プラトンの対話篇のうち、イデア論が表明されているプラトン中期（そして後期）の対話篇を除き、中期に至るまでの初期の対話篇と特に『ソクラテスの弁明』に限って、プラトンの描くソクラテスの思想を研究するジャンルができていく。イデア論が表明されている対話篇を除外するのは、

1825 アリストテレス『形而上学』第1巻(987a29 sqq)によって、イデア論がプラトンのものであることが証言されているからであり、『ソクラテスの弁明』を含めるのは、ソクラテスの裁判を直接間接に知る当時の人々の目にふれるものであるから、細部における脚色はあるとしても、大筋において事実を再現していると考えられるからである）

・ソクラテスと直接の交渉をもった人々が見たソクラテス

1830 ソクラテス Socrates (前 470/469-399)

クセノポン Xenophon (前 c.430-c.354) (X:20-31/ S:60-71)

プラトン Platon (前 428/427-349/48) (P:20-29/ S.62-71)

アリストパネス Aristophanes (前 c.445-c.385) 『雲』 前423(A:22/ S:47)

1835 →クセノポンとプラトンの知っているソクラテスは、60代の最晩年のほぼ10年間である。

→アリストパネスが、『雲』で描くソクラテスは、46-47歳までのソクラテスに基づいている。

1840 6-2-2 クサンチックペは悪妻か？

二回結婚説(cf. Diogenes Laertius, 2,26)

クセノポン『饗宴』(2,10),

クセノポン『ソクラテスの思い出(ソクラテス回想録)』(2,2)

1845 6-2-3 ソクラテスの「自然」探究

→教科書的哲学史の常識からすると、ソクラテスは「自然」探究とは無縁である、ということになる。

<証言1>

1850 アリストテレス『形而上学』：ソクラテスはいわゆる倫理（人間に関することがら）の問題を扱っているが、自然については何もしていない。

クセノポン（『ソクラテスの思い出（ソクラテス回想録）』）：万有の本性について、この宇宙が本来いかにして生じ、天界の事象がいかなる必然に基づいて生起するかというような問題は、ソクラテスの問答においては取り上げられなかった。

1855 これは、晩年のソクラテスにはあてはまるかもしれないが、もっと若い頃のソクラテスに関しては、事情は異なるのではないか？

<証言2>

1860 プラトン『パイドン』(96A sqq)：「僕は若い頃、自然についての研究と呼ばれている、あの知恵を求めることに、それはもうあきれるほど熱中したことがある。というのは、その知恵は、各々のものが一体何によって生じ、何によって消滅し、また何によって存在するのか、その個々の原因を知ることにあるのだとすると、それは僕にはたいへんすばらしいものに思えたからだ。そこで僕は、何度も自分の考えをあちこち変更しながら、まずこんな問題を検討したものだ。そもそも生物の栄養というものは、ある人々が言うように、熱いものと冷たいものが一緒にある種の腐敗を起こすとき、得られるものなのかどうか。また、我々がものを思うのは、血によってなのか、空気によってなのか、あるいは火によってなのか。それともそうではなくて、頭脳が聴く、見る、嗅ぐという感覚を齎すのであり、これらの感覚から記憶と思いなしが生じ、記憶と思いなしが定着すると、それによって知識が生じるということになるのかどうか。またこれらのことが如何にして滅びるかということも、1870 天空や大地の諸現象も検討の対象となったが、結局、この研究には自分はまったくお話にならないほど、生来向いていないと、自ら痛感したのだ。 . . .」

6-2-4 自然学者としてのソクラテス、論争家・論理家としてのソクラテス

1875 <自然学者としてのソクラテス>

クセノポン『ソクラテスの思い出（ソクラテス回想録）』

1880 p.26, l.1193. の<証言1>がある一方で、クセノポンは、『ソクラテスの思い出（ソクラテス回想録）』の別の箇所(4, 7, 3-5)で、ソクラテスが数学や天文学について、普通にはどの程度まで学べばよいかを語り、専門にかかわる非実用的な知識は学ぶに及ばないと教えた、と伝えているが、その際、ソクラテス自身については、その方面の知識がなかったわけではないことを繰り返し注意している。

アリストパネス『雲』

1885 『雲』の中では、空気中の渦巻き運動(dinos)が、ゼウスの代わりに世界を支配するということが述べられる。（補足：渦巻き運動は、アナクサゴラスにおいて、万物のはじめの混沌の状態から、世界の秩序(kosmos)が開かれるために、世界の知性(ヌース:nous)が最初に、混沌の状態に与える形式である。）

1890 プラトン『ソクラテスの弁明』26D

ソクラテスがアナクサゴラスの書物を読むことが普通のこととして語られている。

プラトン『パイドン』97A-98A

ソクラテスは、ある人がアナクサゴラスの書物の中から、「万物を秩序づけ、万

1895 物の原因となるものは知性（ヌース）である」という説を読んでもくれるのを聞いて、その「原因」に共鳴し、「知性が万物の原因である」ならば、それが、最善であるような仕方でも物を秩序づけ、個々の事物を位置づけるであろうとの期待をもって、大急ぎでその書物を手にし、できるだけはやく読んだが、ソクラテスの期待したような仕方では、知性は使われておらず、大いにがっかりした事情が述べられている。

1900 →アリストテレス学派の伝承によると、ソクラテスはアナクサゴラスの弟子のアルケラオスに学んだと言われる。実際、プラトン『パイドン』の中(96B)で、ソクラテスが最初に挙げる「そもそも生物の栄養というものは、ある人々が言うように、熱いものと冷たいものが一緒にある種の腐敗を起こすとき、得られる（ものなのかどうか）」という説は、「熱いものと冷たいものと混合による一種の腐敗作用から、生物の養いとなる乳汁のようなものが得られる」というアルケラオスの説であると考えられる。

<論争家・論理家としてのソクラテス>

1910 クセノポン『ソクラテスの思い出（ソクラテス回想録）』（4,6,13-15）
「人が何かの問題について、彼に反対の論を立てながら、何も明確な論拠を挙げる
ことができず、証明なしに、例えば自分のいう人間の方が賢いとか、あるいは政治家として優れているとか、一層勇気があるとか、その他そういう種類のことを主張
1915 するとき、いつも彼は議論全体を次のような仕方でも、その根底におかれるべき想定（ヒュポテシス: hypothesis）へと導きかえすのだった。

<君の賞賛する人物の方が、僕のほめる人物よりも、優れた市民だというのが、君の主張なんだね>

<そうです。それが僕の主張です>

1920 <それなら、なぜ最初に、優れた市民とは、どういうことをするものなのかということを検討してみなかったのだろうか>

<それを検討してみましょう>

<では、財政の管理において、国家の財力を一層豊かにする者が、優れた人物だということになるのではないかと>

1925 <そうです。まったくその通りです>

<また戦争の場合には、自国を敵方よりも優勢にする者が、そうなのではないかと>

<そうです。それに違いありません>

<また外交使節としては、工作によって、敵を変じて味方とする者が、まさにそうなのではないかと>

1930 <ええ、当然です>

<それからまた、多くの人たちに向かって呼びかけるときは、対立抗争をやめて、協力一致の精神をもたせるようにする者が、そうなのではないかと>

<そう思います>

1935 と、こういうように議論を、根本の想定を確立するように、とり運んでいくから、反対論の立場にある人々にとっても、事実が判然としてくるのだった。また、自分が何かを詳しく論述する場合には、誰でも承認できる事実を通して、議論を進めていくのが常であった。それは、これが議論として、最も危険のない着実な方法であると信じられていたからである。それだからこそ、私の知っている人々のうちでは、彼の議論が、誰のよりも、聴き手の賛同を博したのであった。彼の主張によれば、
1940 ホメロスがオデュッセウスに「着実な弁論家」の折り紙をつけたのも、オデュッセ

ウスが人々にもっともだと思われていることを通して、議論を進める能力があったと考えたからである、ということになる」

→1) 議論の前提となるものを衝く

1945 エレア派のゼノンに由来する論法。
一種の帰謬法。

→2) 誰でも承認できることがらを通して議論をすすめる
問答法 (ディアレクティケー)。

1950 アリストテレス (『形而上学』13巻, 4, 1078b27-9) は、ソクラテスに始まるものとして、「普遍的定義」と「帰納的論法 (帰納法: エパゴーゲー: epagoge)」を認めている。

1955 自然学者としてのソクラテスも、論争家・論理家としてのソクラテスも、ソクラテス自身のうちになんらかの事実的根拠をもっている、ということができる。

6-2-5 ダイモン

6-2-6 デルポイの神託, 「知と不知」

6-2-7 疑問: 正義の人と政治への関与

1960

6-2-5 ダイモン: ソクラテスにとって ダイモンとは何であったか?

ソクラテスを告訴したメレトスの訴状には、次のようにある。

1965 「ピットス区民, メレトスの子メレトスは, アペロケ区民, ソプロニコスの子ソクラテスを相手取って, 次の件を告発し, この口述に偽りなきことを宣言する。すなわちソクラテスは, 国家の認める神々を認めず, 新しい鬼神 (ダイモン, daimon) のまつりを導入するの罪を犯し, 且つ青年に害悪を及ぼすの罪がある。これはまさに死にあたるものである」 (Diogenes Laertius, 2.40)

このダイモンについて, ソクラテスは次のように語る。

1970 「私から諸君は, 度々その話を聞かれただろうが, 私には, 何か神からの知らせとか, ダイモンからの合図とかいったものが, よく起こるのだ。それはメレトスも, 訴状の中に茶化して書いておいたものである。これは私には, 子供のときから始まったもので, 一種の声となって現れる。そしてそれが現れるときには, いつでも, 私が何かをしようとしているのを, 差止めるのであって, 何かをせよとすすめることは, いかなる場合にもない」 (プラトン『ソクラテスの弁明』31CD)

1975

古典期のギリシア語では, ダイモンは, 何か特別の神霊とか精霊という意味はなく, ソクラテスは, ほとんど常に「ダイモンの合図」とか「ダイモニックなもの (ダイモニオン)」という言い方をしており, 特に名前を出さずに, なんらかの「神的な知らせ」という意味で用いていると言える。

1980

ソクラテスにとって, このダイモンの合図・知らせが具体的にどのようなものであったかは, すでに古代においても様々の説がある。

ブルタルコス『ソクラテスのダイモニオンについて』(11)では, ソクラテスのダイモンの合図はくしゃみであった (メガラ派のテルプシオンの説) とされる。

1985

クセノポン『ソクラテスの思い出 (ソクラテス回想録)』(1,1,4)では, ソクラテスのダイモンの合図は, 禁止的なものに限られないで, 「あることはなせ, あることはなすな」という

合図であったという印象を与える（この点については、一見プラトンの記述と矛盾するが、矛盾しない解釈も可能かもしれない）。

1990 ホメロスの物語においては、人間のことにしばしば神々が介入するが、物語中の人物は、それを神々よりもむしろダイモンについて語る。『イリアス』15巻(461sq)で、弓の名人テウクロスが、弓の切れたのに驚き、ダイモンの仕業ではないかと恐れるが、ホメロスは、これをゼウスの仕業と明かす。ギリシア人のダイモンは未だ擬人化されない最も原始的な宗教的対象であったかもしれない。このように、ギリシア人が神々やダイモンと共に住んでいたことは、現代の我々が自分の言行や意識を、心理学的にコンプレックスやリビドで説明したり、社会構造や経済的階級の対立などで、科学的に説明するのに相当する。ソクラテスのダイモンも単に非科学的なこととしてかたづけられない、我々人間の存在そのものに根ざした深いものをもっている。

2000

6-2-6 デルポイの神託、「知と不知」

<デルポイの神託の謎>

カイレポンという人物が、デルポイへ出かけて、アポロンの神に伺いをたてる。伺い「ソクラテスより誰か知恵のある者はいるか？」

2005 その答「誰もソクラテスより知恵のある者はいない」

これを伝え聞いて、「自分は大小いずれにしても知恵のある者ではない」という自覚をもつソクラテスは、この神託の意味するところは何か、謎解きにとりかかる。

その方法は、誰か自分よりも賢い人を捜し出して、「ほら、ここに自分より知恵のある賢い人間がいるではないか」というように、神託を反駁することである。

2010 この試みはすぐにも成功しそうに思われた。なぜなら、知恵のありそうな人は世の中にたくさんいるように思えたからである。しかし、実際、そううまくいかなかった。

2015 「詳しくその人物-----というだけで、特に名前をあげて言う必要はないだろう。それは政界の人物だった-----その人物を相手に、問答しながら観察しているうちに、何か次のようなことを経験した。つまり、この人は、他の多くの人たちに、知恵のある人物だと思われているらしく、また特に自分自身でもそう思い込んでいるらしいけれども、実はそうではないと、私には思われるようになった」(プラトン『ソクラテスの弁明』21C)

2020

「しかし私は、自分ひとりになったときに、こう考えた。この人も、私も、おそらく善・美なることについては何も知らないけれども、この人は、知らないのに何か知っているように思っている。しかし、私は知らないからその通りにまた、知らないと思っている。だから、このほんの少しのことで、私のほうが知恵があることになるらしい。つまり、私は、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことでまざっているらしいのだ。」(プラトン『ソクラテスの弁明』21D)

2025

世の中で知恵のありそうな人として、ソクラテスが接触した人々は、1)政治家、2)悲劇作品等の作者、3)手に技術をもつ人々、の3種類であった。

2030

1)政治家は、国家社会の事柄について「善美」なことを述べるが、彼らがどこまで真面目に考えているかは疑わしく、却って、無知と無反省が見られる。

2)彼らはいわば文化の担い手として精神的リーダーであるが、作品を書く際、自

2035 分で考えてものを言っているのではなくて、何か神憑かりになって、他の者の考えを述べているにすぎない。彼らは「作家として活動しているということから、自分が世にも大変知恵のある人間だということを、自分が実際にはそうではない他の事柄についても、信じ込んでいる」のをソクラテスは発見する。

2040 3)技術をもつ人々は、それぞれの分野で、ソクラテスの及び得ない知恵をもっている。しかし、彼らも悲劇作家たちと同様で、「技術的な仕上げをうまくやれるからというので、めいめいそれ以外の重要な事柄についても、当然、自分が最高の知者だと考えがちで、「彼らのその間違いが、折角の彼らの知恵をも覆い隠してしまう」

2045 世の中の知者と思われる人々と問答してみた後、ソクラテスは、自問自答する。「どちらを私は受け入れるだろうか。今、私は、彼らのもっている知恵は、少しもこれをもっていないし、彼らの無知も、自分ももっていない。これは、このままのほうが良いのだろうか。それとも、彼らの知恵と無知を二つとも所有するほうが良いのだろうか」これに対するソクラテスの答は、このままでいるほうがよい、というものであった。

2050 「知と不知」～ソクラテスのいわゆる「無知の知」の哲学的意味

ソクラテスに関する3つのポイント

2055 1>ソクラテスの「エウ・プラッテイン (eu prattein)」
「善いもの」=「知 (sophia)」=「知」とは精神(魂)の卓越性に他ならない。従って、哲学とは、「魂への配慮」である。

2060 2>自分(ソクラテス)の知=人間的(anthropine)知(Apol. 20D)
「無知の知」の自覚(oida hoti ouk oida) (Apol. 21D)
「神のみが真の知者であって、およそ人間の知などその前では何の価値ももたない」
「自分が何ごとかを分かっていると考える以前の状態に、たえず、自分を置くように修練すること」

2065 3>ソクラテスの教育
eironeia (空とぼけ) + elenchos (相手を論駁すること) = maieutike (産婆術)
「相手に自分の無知を自覚させる。相手に対する否定と論駁を繰り返し、無知を自覚させ、人間にとっての善・悪、正・不正、徳などについて考えさせる」

2070 2>が最も重要であり、いわゆる「無知の知」の哲学的意味 の理解が正確になされなければならない。

「知と不知」をめぐる3つの場面(資料)

2075 A:いわゆる「最大の事柄=善・美なること」について
「この人も、私も、おそらく善・美なることについては何も知らないけれども、この人は、知らないのに何か知っているように思っている。しかし、私は知らないからその通りにまた、知らないと思っている。だから、このほんの少しのことで、私のほうが知恵があることになるらしい。つまり、私は、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことでまざっているらしいのだ。」(プラトン『ソクラテスの弁明』21D3-7) 既出の箇所

B:技術知について

「例えば、馬について、すべての人がそれをよくすることができるかね・・・いや、それをなしえるのは、ただ一人かあるいは少数の者、つまり馬の扱い方を知っている者だけなのではないのか。そして反対に一般の者は、馬とともにいてそれを取り扱おうとすれば、そのものを悪くするだけではないのか。」(プラトン『ソクラテスの弁明』25A13-B4)

「すべての人間の思いなし・意見(ドクサ)を尊重すべきではない・・・身体のごとについては、ただ一人の、医者であるとか体育術の教師であるとかの、まさにそういう者の思いなし・意見に耳をかたむけねばならない。」(プラトン『クリトン』47A-C)

C:日常生活における一般的なことがらについて

「世の一般の人々は、どういうものが木材や石であるかについて意見が相違すると君は思うかね。誰でもつかまえてきてみるがよい。彼らの言葉は一致して、同じものを指しているかどうか。また、石を取ろうと思ったり、木材を取ろうと思ったりする場合、彼らの動作は同じものに向かうかどうかを。同様のことは、この種のすべてのものについて言えるのだ。というのは、私のだいたい理解したところでは、君がギリシア語(母国語)の使い方を学び知っているといっているのは、このことをさすようだから。」(プラトン『アルキピアデスI』111B11-C3)

6-2-6 デルポイの神託、「知と不知」(続き)

「知と不知」をめぐる3つの場面のまとめ

A:いわゆる「最大の事柄=善・美なること」について

知っている者が不在。しかも、すべての人が互いに異なる思いなしをもっているという場面。この状況で、(1)知らないのに知っていると思う人(一般の人々=Bの区別は解消され、Bでの技術知の所有者も含まれる)に対して、(2)知らないから知らないと思う者、すなわちソクラテスが知を求める者(ピロソポス)としての自分を規定する場面。

2110 B:技術知について

知らない者(一般の人々)と、知識をもっている者(それぞれの専門的な領域での技術知の所有者)の区別。それにともなって、知らない者の判断と、知っている者の判断とが区別されるという場面。

2115 C:日常生活における一般的なことがらについて

一般の人々と知識をもっている者との区別の不在。すべての人が同じように思いなししている。日常言語が基底に使用されている場面。

C:<on(ある)>こと、と<phainomenon(そうみえる)>こと、との区別が見い出されない。→「見られるとおりにありもする」

B:<on(ある)>こと、と<phainomenon(そうみえる)>こと、とが区別される。

→「健康とみえること」は「健康であること」を保証しない。技術知は、自然本性の把握。Knowing how~の把握。自然(ピュシス)がどうなっているかの把握。

A:「最大の事柄=善・美なること」、全体としての普遍の知。

アリストテレス『形而上学』第1巻6章 987b1-2 「(ソクラテスは)倫理的な事柄については、これを事としたが、自然の全体については何のかえりみるどころもなかった」



2130 → (ソクラテスにとっての) 倫理的な事柄とは、我々一人一人が「一なる」主体でなければならず、個々の事実にかかわる存在把握(Cの場面)が問題ではなく、また、自然においてあるという個々の領域にかかわる技術知(Bの場面)が問題でもなく、我々の行為において、つねに「全体としての普遍」にさらされている場面においてある。

2135 6-2-7 疑問：正義の人と政治への関与

ソクラテスの求める知=「よく生きる」ための全ての事柄を処理する大切なもの
=ほとんど政治、ポリスを治めるための知と重なるもの

2140 「それにしても、おかしなことだと思われるであろう。私的交わりのかたちでは、いま言われたようなことを勧告して廻り、余計なおせっかきをしていながら、公には、大衆の前に現れて、そのなすべきことを、国民全体に勧告するというのを敢えてしないというのは」(プラトン『ソクラテスの弁明』31C)

ソクラテスは政治に介入することをダイモンによって禁止される。

2145 「もし私が、以前から国政のごたごたにたずさわることを企てていたら、私はとくに身を滅ぼし、あなた方のためにも、私自身のためにも何ら益するところがなかったであろう。というのは、諸君や、あるいは他の多くの人々に対して、正直一途の反対をして、多くの不正や違法が国家の中で行われるのを、どこまでも阻止しようとするならば、人間誰でも身を全うする者はいないだろうから。むしろ本当に正義のために戦おうとする者は、それで少しの間でも、身を全うしようとするならば、私人としてあることが必要なものであって、公人として行動するべきではない」(プラトン『ソクラテスの弁明』31D-32A)

2155 「ただ生きるということではなくて、よく(eu)生きる(zen)ということが大事とされなければならない」(プラトン『クリトン』48B)

2012/9/12
202

2160 「尊いこと、善いことというのは、命が助かるとか、命を助けるとかいうこととは別のことなのだ。自分がどんな人間であるかということとはお構いなしに、ただ自分の命を保ち、どれほどかの時間でも生きるなどということは、男子の問題とするべきことではない。むしろそういうことは神に一任し、何びとも死の定めをまぬかれぬものだということでは、昔からの言い伝えを守る女たちの言を信じ、その次のこと、すなわち生きるはずの時間を、どうしたら最もよく生きられるかを考えるべきだ」(プラトン『ゴルギアス』512D-513B)

2165 3. 小ソクラテス(学)派

ソクラテス自身は、特定の学派をつくらなかったが、彼の言行は、周囲の人々に影響を及ぼし、ソクラテスに親しい人々の集まりが形成された。その人々の名は、プラトン『パイドン』(598C)に記されている。そのうち、活動内容が知られているのは、アンティステネス、アリステイッポス、エウクレイデス、プラトンの四名であるが、プラトンを除く他の人々を「小ソクラテス(学)派」と呼ぶことがある。

2175 3-1 アンティステネス(前455頃~360頃)
キユニコス(犬儒)学派の創始者? 徳中心主義。「幸福になるには徳だけで足りる」(D.L., VI, 11). キユニコス(犬儒)学派のディオゲネス、クラテス、ストアのゼノンの思想的素地となる。

「ソクラテ斯的強さ」を賞賛しつつも、「徳は実践の中にあるのであって、多くの言葉も学問も必要としない」(D.L., VI, 11)という点は、ソクラテスとは異なる。「快楽に耽るくらいなら、気が狂っているほうがよい」(D.L., VI, 3)とも。

2180 3-2 キュレネのアリスティッポス(前435頃~355頃)

洗練された快楽主義。「一番よいのは、快楽に打ち勝つてこれに負かせられないことであり、快楽を控えることではない」(D.L., II, 75)。ただし、アリスティッポス(とキュレネ派)は、個々の現在の快楽だけを対象とする点でソクラテスとは異なる。

2185 ソクラテスは、政治を回避しつつもアテナイ市民として過ごしたが、アリスティッポスは、どのポリスにも属さないクセノス(異邦人)であることを選ぶ。後のキュニコス(犬儒)学派のディオゲネスのコスモポリテース(世界市民)の先駆。

3-3 メガラのエウクレイデス(前450頃~365頃)

2190 ソクラテスの論理的側面に影響を受け、パルメニデスをも学ぶ(D.L., II, 106)。善に関する形而上学。「善は一つ」であり、「善に対立するもの(悪)は存在しない」(D.L., II, 106)。メガラ派の論理的思索は、ストア派の論理に影響を及ぼす。

6- 4. プラトン, Platon (Πλάτων ὁ Ἀθηναῖος, 427-347)

2195 The safest general characterization of the European philosophical tradition is that it consists of a series of footnotes to Plato.

[A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Part II, chap.1, sect.1]

<参考書の紹介>

2200 藤澤令夫『プラトンの哲学』岩波新書。

[I] 生涯と著作 / [A] 生涯 / [B] 著作

[II] 哲学 / [A] 基本的動因 / [B] イデア論の形成と確立 / [C] 論理的・認識論的反省と全体的世界像の確立

2205

[I] 生涯と著作

伝記(プラトンについての伝記)が2, 3ある。

Diogenes Laertios, III (A.D. 2-3C)

Epistolae(手紙)が13通ほど残っている(全部が真作とは思われない)

2210 III, VII, VIII, X, XI, XIII は真らしい。I, II, XII はきわめてあやしい。

[A] 生涯

(1) 年代と家系

Apollodorosの伝える年代(D.L.が引用)

2215 生: 第88回のOlympiosの第1年目のTargelionの7日

第1回オリュンピア祭は、776年: $776 - 87 \times 4 = 428$ 年

A.C.428, Targelionは、11月。但し、当時の暦と現在のものはずれている。

----- 427 -----

今日の暦: 7, 8, 9, 10, 11, 12, 1, 2, 3, 4, 5, 6

2220 当時の暦: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12

----- 428 -----

死: 第108回のOlympiosの第1年目

→428/427

→348/347

2225 生まれた時：ペロポネソス戦争が始まって5年目くらい。
ペリクレスが死んで1～2年後。
死んだ時：ピリッポスが即位し、勢力を拡げつつあった時代。

思想形成という点では、ペロポネソス戦争の暗雲、アテナイの敗北、そしてアテナイ政治の混乱期を体験したことが重要である。
2230 415. アテナイ、シケリア遠征の失敗(Pl. 約12歳)
404. アテナイの敗北(Pl. 約23歳)

家系

2235 父：Ariston, 母：Perictione, 兄：Adeimantos, Glaucon, 姉(妹): Potone
父は、Pl.の子供の頃に死に、その後、母は、叔父にあたる人と再婚している。
義父：Pyrilonpes, 弟：Antiphos
Aristonの家系--- 伝説上のアテナイの王 Codrosに通じる家。
Perictioneの家系--- Solonの後裔、その家系には歴史上の有名人物が多い。
(民主政治に結びついた名門である)

2240 Pl.は、生涯結婚せず、子供もなかった。Epist.XIIIによると、親戚の子供を預かっている。
財産：D.L., III, 41-43. Pl.の遺言。
土地2箇所、銀貨3ムナ、銀の皿1枚、銀の盃、金の指輪と耳飾り1つづつ、
3ムナの貸し金、借金なし。
2245 (アリストテレスと比べると桁違いなほど、つつましい)

(2)Pl.の生涯

シケリアから帰還 第2回
(生) (Socratesの死) アカデメイア創設 シケリア行き (死)
2250 427 ----- 399 ----- 387 ----- 367 ----- 347
(28歳) (40歳) (60歳)
-----(a)----|-----(b)----|------(c)-----

2255 (a) Lehrjahre 修行時代
(b) Wanderjahre 遍歴時代
(c) Meisterjahre マイスター時代

2260 (a)Lehrjahre 修行時代について

アテナイという民主制のポリスにおいて、家柄と素質にめぐまれて生まれたPl.が、その生まれた相応しい教育を受け、ペロポネソス戦争が祖国の敗戦で終わるまで、兵役に服しつつ、成長してゆく。このアテナイというポリスにおいて、この家柄に生まれたPl.に期待され、彼自身もそのつもりであった前途は、政治家となって、
2265 国家・公共の仕事に従事することであり、彼の受けた教育もそのためのものであった。他方、この間に、ソクラテスという特異な精神とその独特な生き方とが、Pl.の事前に用意された、この前途を現実に変更させるには至らないが、しかし、それとはまったく異質な作用力を目立たない形で、確実にPl.の内部に用意しつつあった。この潜在的に蓄積された作用力は、しかし、前404年の敗戦から、ソクラテスの刑

2270 死に至までの相次ぐ出来事によって、一挙に、顕在化する。この顕在化によって同時に、彼が選ぶべき、二つの生き方は、すなわち、前から用意されていた実際の政治の道と、ソクラテス的なピロソビアの道の両者の対立も顕在化する。そして、PL.は、この二つの方向を結ぶ一点を求めて、(b) Wanderjahre 遍歴時代へと入ってゆく。

2275 (b) Wanderjahre 12年間 (28-40才, 399-387 AC) について

「政治の道」と「ソクラテスの示した道」を結ぶ一点を求めつつwander nする (外面的, 内面的に)。

2280 (外面的)

Pl.は、Soc.の仲間らと共に、Soc.の死後、メガラに身を引く。
D.L. III, 6: ヘルモゲネス曰く、メガラ派のEukleidesのところへ身をよせていた。

2285 キュレネー (キュレナイカ) へ行ったらしい (が、確実ではない)。

- ・ Legg. 656E: エジプトのことを見てきたように語っている。
- ・ Tim. : エジプトの歴史に対して、ギリシアはまだ若い。
最後には、シケリアへ行っている (晩年)。

2290 メガラやキュレネーへは、それほど長期にわたって行っている、とは思われない。
Soc.の死後、4年後、395年、コリントスの戦いに、Pl.は騎兵として参加。
スバルタ × アテナイ・テーバイ

(内面的)

2295 Soc.の刑死によって、政治に絶望したとは言えない。実際政治の正しいあり方は、
そう簡単に実現されるものではない。

2300 *Epist. VII, 325C* 「こういった事柄や実際に政治にあたっている人たちのことや、さらには、法律や習俗のことを考えてみると、考察が深まるにつれて、年令の進むにつれて、それだけ一層、国の政治を正しく行なうことがますます困難であると思われた」

2305 最初のうちは、国家公共のことをやるのだ、と熱意に燃えていたが、いろいろな経験をした後に、目がくらんでしまった。政治のことを理念的に考察するということは、けっしてやめないが、実際に政治に参加することに関しては、常にその機会をまつ、という態度をとる。

——正しい政治の可能性に対して、pessimisticになってゆきつつも、それをあきらめてしまうことはなく、それについての考察を続けながら、実践の機会をまつ。

しかし、民主制による義務的な役割としての政治関与は、している。国民議会 ekklesiaなどへの参与。

2310 ・ Soc.を主人公とする対話篇の執筆。

——Soc.的哲学の意味の追求。

Soc.の死後の10年間 (シケリア行きまで) にかけて公表された対話篇はかなりの数にのぼる。——前期対話篇。

2315 これらは、Soc.を比較的忠実に描いている作品である (Socratic dialogues 「ソク

ラテスの対話篇」).

しかし, *Apol. Soc.*(『ソクラテスの弁明』) 以外は, すべて創作であって, 「忠実な(に)」ということの意味は, (Pl.からみて) ソクラテスならば, こう言うであろう, ということを書いている, ということである.

2320

Epist. VII, 326A-B 「最後には, こう考えるようになった(2つの道のどちらかを進むことについて). 私は, どうしても次のように言わざるを得なくなった. 私の言うことは, 真のphilosophiaを営めたたえることに他ならないが, それは, すなわち, 国家・社会的な正義も, 個々の私人の正義もすべてが, ただ, このphilosophiaからこそ, みてとることが可能となるのである. 本当の意味において正しく哲学する者が, 政治的権力の座につくか, あるいは, 諸国家において, 権力を所有する人々が, 何らかの神の配慮によって, 本当に哲学するようになるか, そのどちらかが実現するまでは, 人類は不幸から救われることはないであろう」

2325

2330

以上は, (Pl.自身のもとのされる書簡に述べられた) シケリアへ行く直前(40才)のPl.の考えである. この考え方は, ほとんど内容的には, *Resp.(Politeia, 『国家』)V, 437D* における「哲人政治家(哲人王)」の思想と同じである.

2335

Epist. VII, 327 A 「私は, そのころまだ若かったDionと交わるようになり, 人間にとって何が最もよいことかに関する私の考えを彼に, 言葉によって説明し, それを実行するように彼に勧めたが, そうすることによって, 私がはからずも, 将来の僭主制崩壊を, ある意味において工作していることを, 知る由もなかった. Dionは, 何につけても, 私の言葉について物わかりがよかった. 誰にもまして彼は, 私の教えに従って, 残りの人生を実行することを欲するようになった」

2340

387 末ころ, アテナイへ帰国する.

言い伝え(コルネリウス・ネポス, ディオドロス・シキュロス, プルタルコス, D.L.)によると, アテナイへ帰る途中, troubleに巻き込まれて, 奴隷として売られた, という. (→しかし, 確証はない) この頃は, 物騒な時代であったから, あり得ることである.

2345

(c)Meisterjahre, 387-347(40-80才) について

Pl.は「自分がこれからの生涯をかけてやらなければならない仕事は何であるか」をはっきり見ていた, といえる.

2350

↓

それまでの思索と体験のすべてを注ぎ込んで, それを包括した形においてphilosophiaを確立すること, である. → philosophiaを, 人間の営みの中にひとつのgenreとして確実に位置付けることであった.

2355

Italia, Siceliaに旅立つ前に, Pl.の中に形成されつつあった政治権力と哲学的思索がむすびつくという理想に少しでも近づくために, なし得ることをなす, ということであり, これをしなければ, ポリス(polis, 国家)にとっても, 人間(anthropoi)にとっても, 常に(aei)不幸である, と考えられた.

そのために,

2360

1)具体的には, アカデメイア(Akademeia)という学園を創設する. これによって, 人々に, 自分の理想と教えを授ける教育を与える. →哲人政治家に近い人間を養成

する。

2) Wanderjahreにおいて、はじめられた著作活動を継続して発展させる。→Pl.独自の哲学の形成、および、人々を哲学へ誘うものとしての「対話篇 dialogoi」を書く。

2365

1), 2)は、いずれも、生涯のおわりまで、たえまなく続けられた。

アカデメイアについて。

2370

Meisterjahreは、他の時代に比べると、比較的安定していたので、あまりよく知られていない。

Ἀκαδημία (Academeia) アテナイの北西の郊外に、Academosという名の神(英雄神)が祭られていた、一種の公園。その土地の名が、「アカデーメイア」(アカデメイア)であった。プラタナスが繁っていて、昔から詩人によって歌われていた。

2375

この土地を、Pl.は、387年、帰国からあまり時間がたたないうちに購入した。はじめ、屋外で教え、後に建物が建てられた。公的には、一種の宗教的ギルドの資格 thiasos(Vereinswesen)をもっていた。

2380

86ACにスラが侵入して、アテナイを占領した時に、郊外から市内に移された。529ADまで存続した(ユスティニアヌスによる閉鎖まで)。

学校としてのAcademeiaについては、次の著作を参照せよ(用いる資料については、資料批判が足りない、との評あり)。広川洋一『プラトンの学園アカデメイア』(岩波書店)

2385

- ・教育の指導理念
 - ・学科目、カリキュラムについては、Resp.VIIIによって推量できる。
- 518 B sq. 洞窟の比喩の後で、教育の在り方について述べられる。

2390

理念「paideia (教育)」ということは、ある人々が、(教育は、視力のない盲目の人々に視力を植え付けるように、無知な者に知識を植え付けると)主張するような性格のものではない。そうではなくて、視る力はあるが、正しく育てられていないために、正しい方向に視る力を向けていない者を向け変えてやること、暗闇から明るみの方へ向け変えてやることである。そのためには、目だけではなく体全体を向け変えてやらなければならないのと同様に、魂の目を向け変えるために、全魂、魂全体を向け変えなければならない]

2395

<哲学的理念>

2400

暗闇	→	明るみ
生成の世界	→	实在の世界
可視的世界		思考によって捉えられる世界

2405

学科目：数学的諸学科の重視

哲学的問答法

ἀριθμητική(arithmetike)算術 対話術
γεωμετρία(geometria)幾何 → διαλεκτική(dialektike)問答法
ἀστρονομία(astronomia)天文学—観察よりも理論を重視
2410 ἀρμονία(harmonia)音楽(学)—調和を構成する学

それ故、前4Cのギリシアにおいて、Academeiaは、数学研究の最も重要な拠点となった。後のエウクレイデス(ユークリッド)の基礎的な研究がここでなされた。

2415 (ἀγεωμέτρητος μηδεις εισίτω.

ageometretos medeis eisito.

「幾何学を解さざる者、何人(なんびと)も入る入るべからず」
これは、新プラトン派がAristotelesの著作への古註において伝えた言葉。()

2420 Pl.の生涯: Meisterjahreの後半

最後のシケリア行き、シュラクサイへ

368 AC, Dionysios I (431-368) 死, → Dionysios II へ

367 AC, Sicelia行きで、それまでの安定した時期の平和が破られる。

2425

Epist. VII, 327 E 「哲学と大国の支配権が同一人物の内で結び付くという機会が、完全に実現するときがあるとすれば、今こそ、それである」

Siceliaへ行った結果は、Pl.の怖れていた通りになった。

2430

347 Pl.の死に方:

Pl.はものを書きながら死んだ。

..... Plato scribens est mortuus (Cicero: *De senectute*, 13)

2435

別の伝承では、婚礼の宴に呼ばれて、音楽を聴きながら死んだ。

アカデメイアの庭に埋葬された。

2440 次は、[B] [著作] について述べる。

[B] [著作] 我々が所有しているPl.自身の著作

36篇: Opera Omnia として伝わっている。

2445

ローマ時代, Thrasyllus が初めて、全集の形で編纂した。

Thrasyllus 自身の年代はよく分からないが、Tiberius帝(在位: 14-37 A.D.)と親しかった。

4部作が9つで、36篇

2450

4篇単位というのは、悲劇の上演形式に倣っている。tetralogiaという。

Tetralogia I

Tetralogia II

Tetralogia III

	Euthyphro	Cratylus	Parmenides
	Apologia Socratis	Theaetetus	Philebus
2455	Crito	Sophista	Symposium
	Phaedo	Politicus	Phaedrus

	Tetralogia IV	Tetralogia V	Tetralogia VI
	Alcibiades I	Theages	Euthydemus
2460	Alcibiades II	Charmides	Protagoras
	Hipparchus	Laches	Gorgias
	Amatores	Lysis	Meno

	Tetralogia VII	Tetralogia VIII	Tetralogia IX
	Hippias Maior	Clitopho	Minos
2465	Hippias Minor	Respublica	Leges
	Io	Timaeus	Epinomis
	Menexenus	Critias	Epistolae

2470 各々のTetralogiaをどういうprincipalに基づいて編纂したのかということがはっきりしていない。

--textual critics--

2475 2400年をさかのぼって、Pl.の自筆の原稿にまで遡っていなければならない。それがいかにして保証されるのか？ 他の人々の著作には、ほとんど失われてしまった。我々は、本当に、Pl.の著作をそのまま手にしているのか？

・18c末～19c 近代的に古典文献学 Philologie
(主として19c)

2480 textual criticus, apparatus criticus

伝承された文献から、あらゆる状況、条件を考慮して、Pl.自身のテキストを再構成する作業。

L.F.Heindorf :

2485 1802～ プラトン選集の編纂。文献学的意識をもつての初めての編纂。

Fr.Ast 全集 1819～

G.Stallbaum 全集 1828～

I.Bekker 全集 1826～

2490

・活字で印刷されたPl.全集は400年程しか遡れない。(16C)

最古のものは、Editio Aldina アルド版 1513

H.Stephanus ステファヌス版 1578(箇所指摘の基準)

2495 (ギリシア語・ラテン語対訳)

・Manuscriptum, 略号 MS. (sg.), MSS. (pl.)

Codex: 「羊皮紙をとじた冊子本」の意味

2500 Codex 「冊子本」は、巻物 *πάπυρος* と区別されて言われる。

Codex 「冊子本」は、4 A.D.からあらわれるが、一般には、9Cからひろく用いられるようになった。この期間が、ちょうど古代末期から中世へ移る一種の混迷時代と重なっている。この期間に、古代の書物は、きびしく淘汰されて、多くのものが消滅した。

2505

Pl.の書物もキリスト教にとっては、異教であったが、哲学に真摯な人々は、それぞれの思索の源泉を求めて、修道院において、Pl.の書物は多く、書き移された *manuscriptum* (写本にされた)。従って、このような *manuscriptum* はヨーロッパ各地に散在している。

2510

これらを調べる仕事で功績のあったのは、I.Bekker, M.Schanz である。
Pl.については、178見つかった。そのうち、重要なものが、20種類あり、それらを系統付けると、ほぼ4 (乃至5) 種類に還元できる。

2515

現在一般に用いられている記号で示すと、

A. Codex Parisinus 9C-10C 初めのもの
Tetralogia VIII, IX しか含まれていない。

2520

T. Codex Venetus 11c頃
(Marcianus= St.Marco)
Tetralogia I~VII, VIIIの一部 (『国家』I~III巻の途中)

2525

B. Codex Bodleianus (Oxfordにある: Clarkianus) 9C末
895年11月、ヨハネス写字生がある人 (アレタス Ar ethas) のために写す。
この写本の終わりに日付がある。1801年に、クラークが発見。聖ヨハネ修道院、多島海。
Tetralogia I~IV Bは、写本として信頼度が高い。

2530

W. Codex Vindobonensis 1000年前後 (12C頃と言われていた)

J.Burnetは、このW.を重用視している。
Tetralogia I~III, IV~VII (順序が混乱している)

2535

F. Codex Vindobonensis 13C, 14C 頃
W. とは、別系統
Tetralogia I~IX
Gorigias に関しては、重用である。

2540

☞ B Codex からPl.までは、1300年の隔たりがある。

-- papyrus の時代

πάπυρος 水草の名 (*cyperus papyrus* 学名)
↓ 古代ナイル川に生えていた

2545 この茎が, βύβλος と呼ばれた. → βιβλος → 本
冊子本と区別して, 卷子本という.

↓

第何巻というのは, そこで πάπυρος がきれているからで, 内容的にきれているわけではない.

2550

19C末に, エジプトの砂漠で, 3-8 A.D.頃の πάπυρος が発見された.
Pl. 関係では, Oxyrhinchos の πάπυρος が有名である. (無視できない
πάπυρος である)

2555

Codexは, 専門の知識がないと読めないが, πάπυρος は, 大文字を全く区切らずに並べてある——誤写の可能性もあり, 不安定な状態にある.

しかし, なんとかPl.のテキストに正確さを求める要求があったので, 何度かの組織的な仕事になされたため, Pl.のテキストが, 現代の形になっていった.

2560

- ・アカデメイアの伝統
- ・アレクサンドリア (図書館) 2-3C B.C. 図書館の蒐集. 文献学.
- ・ロドス島: 学者が多く出た. Poseidonios → Thrasyllus
- ・2C A.D. ローマ, 新プラトン派

2565

Pl. 死
347 ----- 0 ----- 895 ----- 1500 ----- 18C末 -- 現代
 Thrasyllus
 papyrus -- | -- Codex -- | -- 活字本 -----

2570

思想家 (哲学者) としては, Pl.の著作だけが, どれひとつとして失われることなく2400年程生き延びた. そして, (Homerosと並んで) 各時代の精神的な糧となってきた.

[B] [著作] の続き

2575

「B. Codex Bodleianus (Oxfordにある: Clarkianus) 9C末」への補足
Bodleianus . . . Oxford大学図書館再建者 Sir Thomas Bodley
Clarkianus . . . 写本の発見者 E.D. Clarke

「1801年に, クラークが発見. 聖ヨハネ修道院, 多島海.」

2580

エーゲ海南東部 (=多島海), パトモス島の聖ヨハネ修道院で, イギリスの旅行家, 鉱物学者が, 荒廃した修道院の床に乱雑に積み重ねられていたのを発見. これらを買って, イギリス (オックスフォード) に送る.

末尾の記載:

「御創世以来6404年11月, パトライの補祭アレタスのために写字職人 (カリグラポス) ヨハネス (イオアンネス) によって書き写された. 革紙の値段 . . . 労賃 . . .」

2585

→ 創世の年代をビザンチン教会の伝統的な算定法によって, 紀元前5509年9月1日とすると, 895年になる.

----- 真偽論~新作か偽作か?

2590

Pl.の著作の伝わり方は、あまりにも完全すぎるので、Opera Omniaの中には、Pl.自身が書いたものではないものが、入っているのではないか？

2595 ⇒Academeiaの中で、Pl.に倣って、Socrates的対話篇を書くことがよく行なわれていたらしい。それが後に、Pl.のOpera Omniaの中に混入したものと考えられる。それは、BC 4Cのギリシア語の文体になっている。

2600 ⇒また、後に、アレクサンドリアなどの図書館に、偽物を作って売り込むことが行なわれた。特に、手紙（書簡）の場合。

2605 1)これらの内には、古人によって、偽作とされているものがある。

～36篇の外に置かれる。

νοθεύμενοι (notheumenoι) 外篇

De Iusto, Sisyphus, Eryxias, etc.

2610 2)一方、36篇の内に入れられているが、偽作の疑いのあるものもある。

19世紀のドイツの学者によって議論された。

ひどいになると、自分が決め込んだプラトン哲学に合致しないものを偽作としたりした。しかし、今日では、大体、穏健な見解に落ち着いている。だが、穏健な見方をしてもなお、偽作の疑いのあるものは、以下の通りである。

*Theages, Hipparchus, Amatores, Minos, Clitopho, Epistotlae*の幾つかこれらに比べると、真作に近い思われるが、やや疑われるのは、*Alcibiades I, II* である。

2615 ~執筆の順序？

順序の推定

2620 1) 思想内容的観点（主観的）

2) 文体統計学的観点

e.g. τὸ ὄντι (to onti) . . . 前期に多い

ὄντως (ontos) . . . 後期に多い

vowel - - - hiatus

L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, 1867.

2625 Campbellとは、独立に、Schanzが同じことをしている。

W. Dittenberger, 1881.

M. Schanz, 1886.

C. Ritter - - - Goetheの場合について実証する。

2630 W. Lutoslawski, 1903.

1) 思想内容上からは、Schr eier macher によれば、初期に*Phaedrus*を置いたが、2)の方法によって、これは、中期の後のほうに置かれることになった。

2635 前期の中では、*Cratylus, Gorgias, Meno* が後のほうであるということ以外は、他はまったく分からない。

中期は、2)の方法によって、別紙のようになる(別紙参照)。

2640 後期では、*Sophistes(Sophista)*から、がらりと文体が変わる。*Nomoi(Leges)*と
*Epinomis*が最後であることは分かっている。

著作年代を決定することは、プラトンの哲学をいかに理解するかという点できわめて重要な意味をもつ。

2645

――Pl.の著作が対話篇であることの意味と問題点――

2650 我々が通常接する哲学的著作は、一人称で語られ、組織的体系的に述べられるものである。しかし、Pl.においてはそうになっていない。ほとんどすべてが対話篇である。(例外、*Apologia Socratis*や*Epistola*など)

2655 対話篇の中では、著作の表題がテーマを示すものとしては、*Respublica*, *Leges*, *Sophista*, *Politicus*, *Epinomis*場面を示すものとして、*Symposium*があるけれども、他のものは、テーマではなく、人物名である。その人物名も、その人物が主役であるのは、*Parmenides*, *Timaeus*, *Critias*である。それ以外は、*Socrates*の対話相手役の名であるものが多い(これらにおいては、主役は*Socrates*である)。

～対話篇であることから生じる問題

2660 1.著者であるPl.自身が自分の見解を表明することはまったくない。大多数の対話篇
2665 においては、主役は*Socrates*である(前期、中期)。*Socrates*がまったく登場しないのは、*Leges*, *Epinomis*である。また、*Socrates*は一応登場するが、主役は他の人が演じるのは、*Sophista*, *Politicus*(エレアからの客人が主役)、また、*Parmenides*, *Timaeus*, *Critias*である(後期)。後期で例外的に、*Socrates*が主役を演じるものとしては、*Philebus*がある。

この主役を演じる*Socrates*について両極端の見方が可能である。

2670 <1>*Socrates*は、ただ、Pl.の見解を表明するための傀儡にすぎない。(⇒後期には何故*Socrates*を登場させなかったか?)

<2>Pl.は自分自身の見解をまったく表明せず、歴史的な*Socrates*の見解を忠実に再現しようとしている。

2675 もし、この<1>、<2>の中間の説をとろうとするならば、どこまでが*Socrates*の見解で、どこからPl.自身の見解であるかが問題になる。(ほとんどの場合、登場人物は歴史的に実在した人物である)

2680 2.ひとつの哲学的思想を体系的に述べることは、対話篇形式になじまないし、実際、それはなされていない。(しかし、やや体系的であると言えるのは、*Leges*, *Timaeus*, *Respublica*くらいである)

さらに、対話篇相互の内容的連関が意図されていない。
(しかし、連関があるとされるのは、*Sophistes*と*Politicus*に形式的連関がある。
2685 また、*Timaeus*と*Critias*, *Leges*と*Epinomis*)

おのずから内容的連関が出てくることはあっても、著作者によってはじめから意図されたものではない。

2690 cf. 近世の対話篇, Berkeley-- 3つの対話篇~連関が意図されている。

従って、各々の対話篇は、それぞれ独立している。そこで時には、矛盾すると思われる登場人物の発言がある。そこに、どのようにして、Pl.の思想を読み取ればよいのか、という問題がある。

2695 3.これらの著作の中に、Pl.の思想を見い出そうとする我々にとって、水をさすようなPl.自身の言葉がある。 Ep. VII, 347C sqq(cf. Ep. II, 314C)

「この問題(*philosophia*)について、私の書物はないし、これからもないだろう。何故なら、それは他の学問のように、けっして語られうるものではないからである。それはむしろ、ことがらそのものについて、多くの共在と共生を重ねているうちに、
2700 突如として、いわば、火花が散って光が点火される如くに、魂の中に生じる。一旦生じた後は、おのずから成長していく。ただし、これだけは私はよく知っているが、そのことが書かれたり、語られたりするものであるならば、誰よりも私によってこそ、もっともよく語られうるであろう」

2705 (ここまでのまとめ)

—Pl.の著作が対話篇であることの意味と問題点— (続き)
~対話篇であることから生じる問題

2710 1.著者であるPl.自身が自分の見解を表明することはまったくない。大多数の対話篇においては、主役はSocratesである(前期, 中期)。

2.ひとつの哲学的思想を体系的に述べることは、対話篇形式になじまないし、実際、それはなされていない。

2715 3.これらの著作の中に、Pl.の思想を見い出そうとする我々にとって、水をさすようなPl.自身の言葉がある。 Ep. VII, 347C sqq(cf. Ep. II, 314C)

「この問題(*philosophia*)について、私の書物はないし、これからもないだろう」

2720

→学界の動向として、アカデメイアでの講義を再構成する試みがなされたが、それは、Pl.の言うように「何も(哲学を)分かっていない人」の報告にすぎないかもしれない。

2725 ・「思考」ということをPl.がどのように考えていたか?

||

自己自身との対話(*dialogos*: *διάλογος*)

| *Sophistes* 263E-264A

2775 originがどこにあるのかも、まとまった形で示していない。しかし、Pl.自身がして
いない、そういうことを、後の人々は様々な仕方でも試みている。(ex. Arist. *Meta-*
ph., A., c.6) しかしながら、Pl.自身が本当は「哲学の一番大事なことは、文字で
は書けないが、もし書くとすれば、それは私しかない」(*Epist.* II, 374Csqq.)と言っ
2780 ているのだから、Pl.自身の書いた対話篇そのものをもっとも優先して、Pl.の思想を
学ぶように努めなければならない。事実また、(哲学の)歴史を動かしたのは、
Pl.自身の対話篇であった。(政治思想については、すでに、著作と生涯においてい
くつか言及しているの、以下では省略する)

参考：以下は、すでに、イントロダクションや生涯と著作についての講義で引用紹
2785 介したが、重要な箇所なので、繰り返し、引用しておく。

[*Epist.* II, 374C sqq.]

「この問題(=philosophia)について、私の書物(かきもの)はないし、これからも
ないだろう。何故なら、それは他の学問のように決して語られるものではないから
である。それはむしろ、事柄そのものについて、多くの共在と共生をかさねている
2790 うちに、突如として、いわば、火花が散って光が点火される如くに、魂の中に生ず
る。一旦、生じた後は、おのずから成長してゆく。ただし、これだけは私はよく知っ
ているが、もし、そのことが書かれたり、語られたりするものであるならば、誰よ
りも私によってこそ、もっともよく語られ得るであろう。」

2795

[A] 基本的動因--- Socratesから受け取ったもの

Soc.からの影響

2800 1) Soc.が裁判の席で、もっとも力をこめて訴えたのは、「金銭や評判や地位のこ
とを気にしながら、知恵と真実、そして魂をできるだけ正しくすることにも気がつか
わないで、恥ずかしくないのか」(*Apol.*, 29E)という意味のことであった。

2) その場合、「魂をできるだけすぐれたものにすること」、魂の卓越性(ar ete, ア
2805 レテー)がすなわち、知に他ならないのだけれども、その知が基本的にとるべき態
度は、「無知の知」ということであった。すなわち、本当に知っている状態と、た
だ知っていると思っ込んでいるだけの状態とをきわめて厳格に区別して、自分を、
自分が何事かを知っていると、思っ込む以前の状態にたえず置くように訓練するこ
と。(Apol., 21D)

2810

3) 今のことから、Soc.にとって、哲学すること(知を愛すること)は、具体的には、
自分と他人の知の状態を吟味・批判して無知を悟らせる、という形をとる。
(Apol., 28E)

2815

4) しかし、それでは一体、何のための「無知の自覚」であるのか。すなわち、人間
にとって、知とは、何のためのものであるのか。---それは、人間の幸福のための
ものなのだ。(幸福=eu prattein=行為、行動の有効性、agathon=よい) この「よ
い」ということを広くとると、これは万人共通の欲求である、と言ってよい。Soc.
のしたことは、この「よい」ということを、本来の「よい」eu にしようとする、
2820 意識的な追求である。

Soc.の追及した「よい」は、価値と行為・行動の領域にかかわる。つまり、(本当は知らないのに)知っていると思いついでいるのは、本人にも大きな害を及ぼす。善・美のことについて、何も知らないという点で、「無知の知」が語られる。

2825 5)では、行為・行動、価値について、本当に知っていると言われ得るのは、一体どのような状態であろうか。その点に関するSoc.の態度は、例えば、「悪と知りつつ、それを行なう」「善と知りつつ、それを行なわない」ということは、あり得ないという、Soc.のパラドックスがある。(Protag., 352E) 本当に、知っているなら、
2830 快楽に負けたりしないはずだという、知の厳格な規定がなされ、知は力である、と言われる(Gorgias, 960A-B. 建築について知ったなら、その人は決して過つことはない。それと同様に、正義を知ったなら、不正を犯すことはない)。いやしくも、自分が知った事柄については、決して過たない(Euthydemus, 280A. もし、過つたならば、それはもはや、sophia ではない。) 知ということ、どんな場合においても、人間を幸福にするはずだ、というように考える。知に対する絶対的要求を設定することに他ならない。

6)そのようなすべての考えに立ちながら、Soc.の行なった最も特徴的なことは、人間の生と行動を導く価値について、「～とは何か?」という問いを飽くことなく、追及したことである。

2840 このことが、Pl.に深く影響を与えたことは、彼の初期の対話篇が、「正義とは何か?」「勇氣とは何か?」などが主題になっていることからうかがえる。

7)何故、Soc.はそのような問いを執拗になしたか。

2845 Laches 190A-C

どうしたら視力がもっともよくなるか? それを工夫する場合、そもそも視力とは何であるか、を知らなかったら、工夫のしようがない。人間の徳についても同様である。

我々があるものを知っているとしたら、それが何であるかを言えるはずである。

2850 Soc.は、単にpracticalなmoralistにとどまらず、「何であるか?」という知によって、行為・幸福が可能である、という立場をとる。また、正義と価値は、人間の世界に自然本来的にあるのではなく、「とりきめ nomos」によるだけである、とする道徳的ニヒリズムに対しても、Soc.は、この見解をただ知っているというdoxa (思惑、臆見)に過ぎないと思える。

2855 「何であるか?」という問いに対して、人々がそれであると思っていた答は、Soc.の執拗な問いにあい、吟味・批判されて、問いは未解決のままに残される。そして、Soc.自身も、自ら問いに答を与えることはしない。Soc.自身も無知の立場にとどまる。

2860 しかし、Soc.の実際の行動を見てみると、「何であるか?」という問いの向こうに、実在すると言ってもよいような何物かを、Soc.自身は感知していたと思われる。少なくとも、Pl.にはそう思われた。

「正義」(Apol., 32C-D)について、それを守るためには、死ぬことさえも辞さないという、言葉によってではなく、行動によって(Soc.は)示した。

2865

[B] アイデア論の形成と確立

2870 ([A] 基本的動因 1)~7)で確認したように) Soc.の「無知の知」は、否定の立場に身を
とどめていたのに対し、Pl.は、この否定的立場に内包される積極的側面・可能性
を追求しようとした。

一般的に言えば、philosophia は、知(sophia)を愛し求めること(philo-)である。
では、そのときの、
2875 知(sophia)、すなわち、真の知とはどういうものであるのか？
その真の知がとらえる対象はどういう存在か？
その知の主体(精神・魂)の在り方は、いかなる状態であるのか？
その両方によって、世界と人間はどのように捉えられなければならないか？
このような追及線上に実を結んだのが、Pl.哲学の中核となり、また、後世に大きな
影響を残したイデア論であった。(「イデア論」という場合、知の主体としての
2880 「魂」論を含めて考える)

「イデア論」という呼称は、Pl.自身のものではなく、Arist.以来、付けられた名前
前である。

2885 idea, eidos・・・すがた、かたち、相(実相)
(eidosは日常語としてよく使われる)
これが、その後、哲学的termとして確立される。

Pl.は、イデア論を体系的な形では述べていない。ただ、ひとつひとつの対話篇を通
2890 じて、望見されるものとして考えられる。Pl.の主著である『国家(ポリテ
イア)』(Resp.)において、哲人統治家の思想がはじめて語られる。この思想は、
Pl.が40歳で得た考え方であったと思われるが、これを著作に著わしたのは、10年
以上たってからであるのは、「哲学者とは何か？」の問いに対する答が、イデア論
によって裏付けられなければならないからであろうと思われる。

2895 (1)「～とは何であるか？」(ti esti?)という問い

この問いの問われ方の実際。

Pl.のテキストの中で、どのように表現されて、どのような仕方で追求されたか？

2900 ex.1. Laches, 191E 主題「勇気(andreia)とは何か？」

「勇気について、それが何であるか、言ってくれたまえ。それらすべての事柄(=
勇気があると言われる様々な行為)のうちに、同一のものとしてあるのは、何であ
るか、ということを」

2905 ex.2. Euthyphron, 6D-E 主題「敬虔について」

「すべての敬虔なことがらが、まさにそれによってこそ敬虔であるような、かのす
がた(eidos)それ自体は何であるか？」

2910 その問われているそのものに目を向けることによって、そのものが敬虔かどうか
を判断する。

ex.3. Menon, 72C 主題「徳(arete)とは何か？」

2915 「たとえ徳の数が多く、いろいろな種類のものがあるとしても、それらの徳は、すべてあるひとつの同じすがた(相, *eidos*)をもっているはずである。その相があるからこそ、それらいずれも徳である、ということになる。これに注目することによって、まさに徳であるところのものを、質問者に対して明らかにするのが答え手としての正しいやり方と言うべきである」

2920 この問いが、対話篇の中で、どのように追求されているか。
Pl.の対話篇にしばしば見られる問答のパターンがある。それは、問われた相手の人物が、Soc.の問いに対して、はじめに、特定の事例をもって答える。Soc.は、それを訂正して、問いの意味を明らかにする。

Laches, 190E

2925 「勇気とは何か？」
「戦列にとどまって、敵を防ぎ、逃げない人が勇気ある人だ」
「では、逃げながら戦う人は？ なぜ、戦争のことだけに限定するのか？ もっと他の場合における勇気もあるだろう」
→ ex.1.の引用に続く。

2930 *Euthyphron*, 6D-E

「敬虔とは何か？」
「不正をはたらいた者を起訴することである」
→ ex.2.の引用に続く。

2935 *Menon*, 72C

「徳とは何か？」
「男の徳は・・・, 女の徳は・・・」
→ ex.3.の引用に続く。

2940 Soc.のこの問いに対して、普通の人だったら、「何がXであるのか？」と解釈するのが、自然な受け取り方である：

2945 「Xとは何であるのか？」 → 「何がXであるのか？」

ti esti X;
Quid X est?
What is X?
Was ist X?
2950 Qu'est-ce que X est?

ギリシア語でも、Xが主語になるのか述語になるのかはっきりしない。これは人々に哲学的な訓練が不足していたというよりも、一般には、この問いは、ostensive definitionを求めているととるのが自然である。

2955 cf. *Hippias Major*, 287D

ソフィストのヒッピアスに、Soc.は、Ti esti to kalon; と問う。「何がto kalon (美)であるか？」と、問うているのではなくて、「to kalon (美)とは何であるか？」と問うている、とSoc.が言うと、ヒッピアスは、同じことだ、と言う。Soc.は、

2960 あなた(=ヒッピアス)のほうで、識者だから、そうかもしれないが、一応、「to kalon (美)とは何であるか？」に答えてくれ、と言う。すると、ヒッピアスは、「美しい娘は美しい」と答える。

すなわち、即物的な答、ostensive definition (具体的なものを明示して示す)に傾く傾向がある。

2965 従って、「Xとは何か？」という問いをするSoc.の着眼点は、注目すべき新しい事柄である。

そこで、なぜSoc.は、この即物的な答を退けるのか？

2970 「これこれのものはXである」というように、Xが述語の位置に置かれると、一般的に、主語のほうで、Xよりも外延がせまい。問われているXと完全に重ならない。「他にも、Xなるものはいろいろある」というのが、Soc.のよく言う言い方である。

(Soc.が即物的な答を退ける理由)

2975 換言すれば、「～がXである」という仕方では、Xを知ったとしても、それはXのすべてを知ったことにならない。知られるべきは、「それらすべての事柄の中に同一のものとしてあるもの」である。

Menon : kath' holou → katholou (普遍)

「知る」ことにおける普遍性への要求

2980

Hippias-Major, 286C-D

2985 ある人が、Soc.に言うには、「これこれは醜い、これこれは美しい、と非難や賞賛していたときに、Soc.よ、一体、君は、美しいということ to kalon が何であるかを知らないでいながら、一体どうして、これこれのものが醜いとか美しいとかいうことがわかるのかね？」

Ti esti X; に対し、特定の事例を挙げて答えることが正しくないばかりでなく、実は、そもそもXが何であるかを知らないならば、特定の事例さえ、挙げる事ができないはずである。

2990 → connotation の知がなければ(先行しなければ)、denotation の知はありえない。

Euthyphron で言われた(eidosについての)考え方が、Hippias Major では少しはっきりしてきている。

2995 (2)「まさに～であるもの」(auto ho esti)

前期対話篇の問われ方は、実際には何を意味しているか？

3000 (i) 美とは何であるか？ という問いに対応して、まさに美であるところのものと、答えられるような何かあるひとつのものが、真の知識の対象たるべきものとして、考えられなければならない。

(ii) この何かあるものは、美しい、と呼ばれる個々のもの(事例)のそのどれひとつとも決して、そのまま同じではない。→超越的側面

3005

(iii) しかし、他方、その何かあるものは、また、我々の経験するすべての美しいものの中に共通に内在するものである。→ 内在性
cf. *Laches* のex.1 (1) 191E

3010 (iv) そして、すべての美しいと呼ばれる事例は、その何かあるものによってこそ、美しくある。つまり、それはすべての美しいものに対して、それに美しいという性格を与えている、ある肝心なものである。→ 根拠性、原因性
cf. *Euthyphron* のex.2 (1) 60E

3015 *Pl.*の対話篇での「何であるか？」という問いの實在的な意味がここに見て取られる。
(「實在的」というのは、「真の認識の対象」ということを意味する)

3020 以上、(i)~(iv)の4つの条件を満たすものが、すでにこの *ti esti*; (何であるか?)の問いの中に含意されている、と考えられる。しかし、あくまで、予想、含意(implication)の状態にとどまっている(前期対話篇)。そして、これに形而上学的意義付けをするところまではいっていない。

auto to kalon

3025 「美そのもの」という表現がみられるが、まだ、この段階では形而上学的対象として扱うには至らない(→後に形而上学的意義付けへ)

Hippias Major (前期対話篇) 286bd, 288a

Cratylus (前期の終頃?) 439CD

ti esti X;

3030 ある事柄の相(eidos)を問うが、イデア(eidos, idea)があること自体を問うことにはならない。前者から後者への移り行きが中期対話篇(*Symp.*, *Phaid.*など)の課題であった。問われているものの、存在論的・形而上学的身分が問われるようになる。それを対象として積極的にとりあげたのが、*Symp.*, 210E~211Bである。

3035 *Symp.*, 210E~211B

恋の神であるErosを賛える弁論。Soc.の話の最後のところ、(巫女)Diotimaの教えてくれたものとして語られる奥義。

- 3040
1. 肉体(の美しさ)に恋する。
 2. 個々の肉体への執着をやめ、精神の美しさに前進する。
 3. 人間の営み、知識の美しさに目が開かれる。
 4. 美の大海原に乗り出して、美を飽くことなく鑑賞する。

3045 (211E~) すなわち、ここまでErosの後について、教導を受けたものは、以上の美しいものを順々に正しく見ながら、今や、漸く、恋愛道の極致に近づこうとするとき、惚然として、一種驚嘆すべき美を観得するでしょう。これこそは、今までの労苦が、まさにそのためであったものです。

auto to kalon

3050 auto ho esti kalon (211C3) 「まさに美であるところのもの」

それがいかなるものであるのかを、Diotimaが述べて言う。

3055 1.まず、第一に、それは常にある。生成・消滅、増大・減少するものではない。

2.第二に、それは相対的な性格のものではない。絶対的なものである。(この点では美しいが、他の点では美しくないとか、あるときは美しいとか、誰々にとっては美しいとかいうものではない。)

3060 3.第三に、特定の事物の形をとったり、あるものに局限されたり、依存したりするものではない。「美しいロゴス・知識」といったものでさえない。

4.純粹にそれ自体として存在し、単一の相(すがた, *eidōs*)をたもつ。

3065 5.他のものはすべて、これを分け持つ・与る・分有する(*metechein*)ことによって、美しくなる。ただし、その分有によって、美そのものは、いささかも影響を受けない。

3070 (以上は、Soc.が自分で考えたこととしてではなくて、Diotimaという女性(巫女)の教えとして語られる。

しかも、上述の段階のことをDiotimaが語る前に、「*Erōs*とは、美しいものを所有しようとすることであり、しかも、できればそれを永遠に所有したい、と思うことである。言い換えれば、不死ということである。しかし、人間は死ぬ。それ故、美しいものの中に子供を生んで、後に残すことによって、不死を達成しようとする。そして、そこまでのことは、Soc.よ、あなたにも分かるでしょう。しかし、そこから先のことはあなたに理解できるかどうか分かりません」と、言って、先に述べたアイデアについて語る。

3075 この言及の仕方は興味深い。実際のSoc.の言行を一步超えた思想を語ろうとする際のPl.の工夫ではないか、と思われる。歴史上のSoc.がそこまで(つまり、アイデアについての考え)語るのは、対話篇の*reality*としては、不自然さが感じられると思われたのかもしれない。

3085 Diotimaの語ったアイデアは、時間というものを超えた永遠性につながるのであろう。*Symp.*のこの箇所は、Soc.の「何であるか?」という問いに含意されたものに内容を与えて、一気に語られたものであるように思われる。

3090 *Symp.*と*Phaed.*において、アイデア論がはじめて表明されるが、どちらが先かについては、決定的なことは言えない。(多くの人には、*Phaed.*が先と考えているが、藤澤令夫は、*Symp.*が先であると感じられる、と述べていたが、1998年刊行の『プラトンの哲学』(岩波新書)pp.90-91においては、はっきりと「『饗宴』から『パイドン』へ」と言っている)

3095 先のDiotimaの話は、*mysterious*ではあるが、しかし、ごく当然のことであるとも思われる。それには、真の知識の対象として、美の場合、Diotimaの言ったことが、先にあげたSoc.の「知る」ということの厳格な条件をよく満たしていることに注意しなければならない。→(Soc.から受け継いだものとしての)「知る」ということに対する厳格な条件への対応

ex. 「美」. どういう場合に「美」を本当に知ったと言えるのか?

3100 我々が現実において見出す美しいものが美しいと実感されても、それは変化してやがては滅び去る存在である。また、たとえ我々がそれを完全な美であるとみて、他の人には、そうは映らないかもしれない。

我々の狭い経験の内では、より美しいもの、よりすばらしいものが他に存在しない、という証明はできない。即ち、それは特定のものでしかない美を知っても、美のすべてを知ったということにはならない。

3105 それ故、真の認識の対象としての「美」は、いかなるものにも局限されないから、超越的な存在であり、生成も、消滅もしない、普遍的(katholou)な存在でなければならない。

3110 が、しかし他方、この超越性や普遍性が、実感性や個性性、具体性を消しさるものだとすれば、それは、Soc.の与えた「知る」ことの自然本来の意味をそこなうことになる。だから、真の知の対象は、普遍的であるが、同時に、この世のあらゆる美しいものに対して、まさに美しいという性格を与えている肝心なものである。

3115 従って、イデアは、「美しい」という言葉が指し示す性格を純粋に、完全にそなえたものであって、それが「美そのもの auto to kalon」ということの意味である。

だから、Pl.のイデアを単に概念(concept, Begriff)とみなすことが誤りであることは明らかである。(俗説として、Soc.が概念を発見し、Pl.がそれを実体化した、と言われることがあるが、それは誤りである) 「美」の概念はちっとも美しくないが、美そのもの(美のイデア)は、輝くばかりに美しくなければならない。

3120 (3)「思惟されるもの」(noeton)

——世界解釈全般へのイデアの適用——

cf. H. Bergson, F. RavaissonのAristote研究について,

3125 (H.Bergson, La vie et l'œuvre de Ravaisson, *La pensée et le mouvant*, Quadrige/PUF, pp.259-260. Œuvres, pp.1455-1456.)

「一般的・普遍的であり、かつ、具体的である」

3130 赤、青、黄、白・・・→ 色である、としてまとめる。 concept, Begriff
・・・レンズによって、白光をとりだす。この一つのもので、それぞれを色たらしめていた。

このことは、Arist.についてはもちろん、Pl.についても言えることである。

3135 ideaは、実質的な性質のものでありながら、個々のものではない。
直接に感覚の対象たりえない。

思惟(されるもの) noeton

→----- 峻別する ←もとはParmenidesによる

3140 感覚・知覚(されるもの) aistheton, horaton

Phaed. Parm.以後、現象(パイノメナ: phainomena)を救う(ソーゼイン: sozein)ことが、philosophiaの課題となった。

3145 数学の対象とのanalogy・・・Phaedo, Politeia

2数の等しさ、円、三角形などが、考察の対象として使われる。しかし、等しさ、円、三角形などは、数学者（幾何学者）が定義するような厳密な仕方では自然界に見出されるようなことはない。（ex. 線にしても幅があってはならない）従って、これらは、純粋な思考の上でのみ捉えられるのであって、決して、砂や紙の上に描かれたりすることはない。定義通りの思惟の対象が、noetonであり、定義通りではない感覚の対象が、aisthetonであって、これらは区別されなければならない。

しかし、数学者（幾何学者）は、感覚の対象を用いて、思惟の対象を考察している。真の対象は、ideaとしてしかない。しかしそれなしには数学（幾何学）が成立しないリアルな対象である。感覚の対象は思惟の対象を近似的に再現しているだけである。Soc.が価値について尋ねていた「何であるか？」という定義を求める問いに対する答となるものが思惟の対象であるから、それは上述のような数学の対象と似たものである。（特に、Politeia VIIで定義される）

3160 Phaed. aisthetonの「等しさ」は「等しさ」そのものにあこがれており、不完全なものである。

そこで、Soc.のti esti;の問の答になるものも、このようなnoetonであって、ideaでなければならない。すなわち、それは純粋な思考によってのみ捉えられる。

3165 (cf. このnoetonという考え方が、Smp.に現われていないことが、Symp.のほうがPhaed.よりも先に書かれたと推定される根拠のひとつである、)

3170 このnoetonが、個々の経験的事物に現われる価値と関連づけられることによって、Soc.のもともとの倫理的な問は、単に倫理だけに限らず、すべてのものに互る単一者（多に対する一）として、自然の領域を含めた世界解釈に適用されるということが展望される。

Phaed. 75CD 「等しさ」

3175 我々の議論は、問と答のprocessを通じて、「まさに～であるところのもの」という刻印を押す一切のものに適用されるのだから。...

Phaed. 65B-D

3180 このことは、およそ、あらゆることについて考えてよい。例えば、大きさ、健康、強さ、一言で言えば、「まさにそれぞれのものであるところのもの」である、すべてのものの本質について。

以上は、Phaed.における(auto) ho esti「まさにそれであるところのもの」のPl.による意識的定式化

3185 Politeia(Resp.), X, 596A

我々が、同じ名で呼ぶところの多なる事物の一組ずつについて、それぞれただひとつであるeidosをたてる慣わしである。（まさに、椅子、ベッドであるところのもの）

見る／見られる・・・光-----太陽

善は、他の様々なアイデアのそのまたアイデアである。

3240 認識は、アイデアによって基礎付けられ、アイデアはさらに善のアイデアによって基礎付けられてはじめて、確固たる認識となる。

存在と善 → 事実と価値 と言ってもよい。

3245 この二つは、究極においては決して切り離されるものではない。著作の中で、善のアイデアが出てくるのはこの箇所だけである（が、Pl.においてこの思想は一貫していると思われる）

Timaeus 29E-30

世界の造り主が、善を意志して、この世界を造った、と言われる。

3250

(5) 「想起(anamnesis)」と「ディアレクティケー(dialektike)」

学ぶこと(mathesis)は想起すること(anamnesis)、という命題によって表明される。著作で表わされているのは、*Meno* 80D-, *Phaedo* 72E-, *Phaedrus* 249B-。

3255

Meno 80D-

3260 人間にとって、学ぶとか、探究する、とかいうことはありえない。何故なら、探究しようとする対象は、我々がすでに知っているか、知らないものかのどちらかである。しかるに、すでに知っているものならば、探究する必要がない。他方、知らないものは、何を探究すればよいのかわからないし、仮に探りあてたとしても、それが探究している当のものであると、どうしてわかるだろうか（わからない）。

3265 Soc.: 人間の魂は、不死であって、今の魂は、すでに一切の事物を見てしまっている。だからこの世において学ぶということは、すでにもっている自分の知識を思い起こすことである。あるひとつのことをきっかけとして、他のものも次々に思い出すことも可能である。（或る賢者の説として、これを支持する）

召使（の少年）に幾何の問題を、教えることなく、質問をするだけで解かせる。

3270 Soc.の結論

ものを知らない人の中にも、実はその知らないことに関する正しい doxa（ドクサ、思惑、憶見、意見、考え）が内在している。何度も、系統的に質問を繰り返すことによって、それは正しい episteme（エピステーメー、知識）となる。

この過程が、anamnesis（想起）である。

3275

Phaedo 72E- 認識論的根拠が補強される。

「等しさ」を例にとる。

3280 似ているものは、本当の「等しさ」にあこがれてはいるが、どこかが欠けている。しかし、我々は、おぼろげながら「等しさ」そのものを、心に判断の基準として抱いている。ということは、何らかのかたちで、我々は「等しさ」そのものを知っていなければならない。

我々が「等しさ」そのものを知ったのは、感覚をし始める以前（つまり、生まれる前）である。それが、感覚を通して（感覚をきっかけとして）思い出される。（つまり、「等しさ」そのものの本来のorigin(起源)は、感覚や（きっかけとなる）経験とは別のところにある）

3285

「等しさ」の事例から（抽象化して）帰納的に「等しさ」そのものを知る、という考え方もあるが、Pl.はそれを避ける。事例から"そのもの"への飛躍・断層が説明できないからであると思われる。Arist.の場合もやはり、帰納（的方法）において、最終的にはたらく（作用する）のは、nous（ヌース）と言われていて、このnousに、事例から"そのもの"への飛躍を担わせていると思われるが、それが十分な説明になっているとは言えない。

3290

cf. I.Kantは、「我々のあらゆる認識は経験とともに始まる(mit der Erfahrung anfangen), ということにはなんの疑いもない。・・・しかし、我々のあらゆる認識は経験とともに起始する(mit der Erfahrung anhebt), といっても、必ずしもあらゆる認識がすべて経験から発現する(aus der Erfahrung entspringt)わけではない」(Kritik der reinen Vernunft, Einleitung, B1)と言っている。

3295

3300 Phaedrus

人間は、生まれる以前に、超天空界で、神々とともに行進しており、イデアを見ていたが、イデアを見ることに失敗して、地上に落ちてくる。eros とは、このときの、特に、美のイデアを思い起こすことである。

3305 Phaedrus 249B-C

人間がものを知るはたらきは、イデア(eidos)と呼ばれるものに即して行なわれなければならない。即ち、雑多な感覚から出発して、思惟 Denken によって、統括された単一なものへと進み出ることによって行なわれなければならない。しかるに、このことは、かつて我々の魂が神の行進についてゆき、今、我々が「ある」と呼んでいる事物を低くみて、真の意味において「ある」ところのものの方へと、頭をもたげたときに目にしたものの、そのものを想起することに他ならない。

3310

Phaedrus 265D

多様に散らばっているものを総覧して、これをただひとつの本質的な相（イデア）へと導くこと。このやり方が、それぞれのものを定義して、明白ならしめるために役立つ（→ディアレクティケー（問答法）の規定・定義のひとつと言われる）

3315

* 「想起」と「ディアレクティケー」は、ひとつの事柄の両側面のようなものであり、同じものであるといってもよい。

3320

「考えること」=沈黙のうちに行なわれる自己自身との対話(dialogos).

「考えること」は、logosをはなれてはありえない。

認識	:	直観性	+	言語性
		↓		↓
		想起		ディアレクティケー

3325

Phaedrus においても「想起」の説明を言語性におくと、それは「ディアレクティ

ケー」の説明になる。

MenoではSoc.の問答法（ディアレクティケー）が、召使の少年の「想起」に対応している。

3330

Phaedrusのディアレクティケーの総合性・・・前期から一貫している。
“ 分析性・・・後期に現われる。

3335 1. Soc.のdialogos（対話・問答）の実際
- 「何であるか？」の問いの追求

2. アイデア探究の方法

3340 3. 善のアイデア探究の方法(Politeia, VI, VII)

4. 総合と分割としてのdialektike（問答法）；また、
アイデア相互の結合関係探究方法としてのdialektike（問答法）(Sophista)

3345

1. dialektike・・・一問一答の形式をとる・・・alethes（真理）
↑ (論理の連鎖をたどる) ↑

対比（この対比をよくあらわしているのはGorgias）

↓

↓

3350

rhetorike（弁論術・修辞学）・・・ソフィスト・・・eikos（もっともらしさ）
説得の技術・なるほど(eikos)と思わせる。
猩紅熱のように話し続けて人を圧倒する。

3355

2. Phaedo 75C-D「我々の議論は、問答のprocessを通じて、くまさに～であるところのもの」という刻印を押す、一切のものに適用される」
ibid., 78B「我々が、問い、かつ、答えながら、あるひとつのものが何であるかを説明するときの対策となるものの本質、それ自体」

3360

3. アイデアの中でも、「善」のアイデアへの探究が目指される。
それまで区別されなかった数学の方向とも区別、対比されつつ、まさに、最高原理である「善」のアイデアに到達する方法としてのディアレクティケー。

「線分の比喩」(Politeia, VI, 509D-511E)

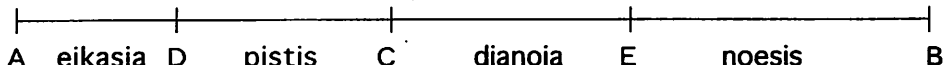
3365

見られるもの(horaton)

思惟されるもの(noeton)

影

物的対象



A eikasia D

pistis C

dianoia E

noesis B

間接的知覚

感覚的確信

悟性的思考

知性的思惟

3370

数学的思考

dialektike

$$AC/CB = AD/DC = CE/EB$$

同じく「思惟されるもの(noeton)」でも、CE, EBでは違う。これは、数学とディ

アレクティケーの違いである。

3375

—相違点—

CE

(1) 数学は仮説(hypothesis)を使う(なお、「仮説」ではなくて、「仮設」と書くのは、hypothesisという語の原義に従っている)。数学は、このhypothesisそのものについては、自明と看做して、根拠づけしない。むしろ、そこから推論によって下へ下がって行き、結論を得る。従って、hypothesis以下の体系は、必然的で整合性をもつが、hypothesisについては、説明されないので、それは「夢の中の必然性」である。

3380

(2) CEが、DCにあたる物的対象を似像として用いる。即ち、図形等を描いて、それを補助手段に用いる。

3385

EB

(1) hypothesisを絶対的出発点とはしない。hypothesisを「下に置かれたもの」として、前進のための踏台として、このhypothesisを根拠付けるために、上にさかのぼり、ついに無仮定のarche(アルケー・原理・始原：ここでは、語られないが、「善」のイデア)に至り、その上で、再び、論理的操作によって下へ降り、様々な帰結を導く。これによって、以前はバラバラの仮説(仮定)であったものが、相互に連絡しあうことになる。

3390

(2) 感覚されるものを何ひとつ補助手段に用いない。思惟されるもののみによって、イデアに到達する。

3395

Politeia(Resp.), VII, 532A-B

人が、dialektikeによって、いかなる感覚にもたよることなく、ただ、logosを用いて、「まさに各々のものであるところのもの」に向かって前進しようと努める最後に、まさに「善」であるところのもの自体に、純粋に知性だけによって捉えるまで退かないならば、そのとき、人は知性界の限界に至ることになる。

3400

4. 分割(diairesis)について

Phaedrus 265

先の行き方とは逆に、自然本来の分節に従って(節々にわかれる)様々な種に分割することができる、ということ。

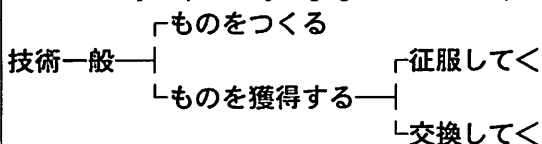
3405

—分割(diairesis)の方法として、新たにdialektikeの中に含まれる。

cf. *Sophista*, *Politicus*, *Philebus*: 「分割」がソフィスト、政治家を定義するために用いられている。

3410

・ 総覧 synopsis, synagoge (Sophista)



3415

・ イデア相互の結合関係

Sophista

3420 アイデア界の中に、類-類・関係的なヒエラルキー(hierachy)を見て取る。――これがdialektikeの課題。

これに基づいて、「いかにして各々のものが関係をもち合うことができるか、また、できないかを、類に即して識別する」(253E)

このdialektikeは、純粋に哲学する人にできることである。

3425

以上のようなdialektikeの方法としての側面は、「形而上学的対象からとりはずされて、純粋な形式となった」という主張(解釈)があるけれども、一概にそうは言えない。というのも、後期に加えられた分割の方法も、「何であるか？」の問いの追求である点では、変化がないし、「分割」は、もともと「総覧 synopsis」

3430

(*Sophista*, 232A)があってはじめて、有効となるからである。
dialektikeについては、実際のテキストでは、*dialegesthai* という動詞形が、前期から一貫して用いられている。その点で、Soc.の実際の対話が、*Phaedrus* においても生きている、ということが言える。

3435

従って、大局的に、かつ、細部も見れば、変化した、というよりも、連続性、一貫性のほうがよく見て取れる。「アイデア(eidos)」が、「種」の意味に用いられながら、しかし、アイデア(形而上学的内容)をさす言葉として用いられている(→Aristotelesへ続く)。ちょうどこのように、dialektikeのlogical aspect(論理的側面)とmetaphysical aspect(形而上学的側面)という2側面が、そのときどきの強調点お違いはあっても、Pl.の哲学の中核を形成し続けていると言える(言い方を変えれば、論理なき直観も、直観なき論理も空虚(koupos)である)。

3440

Pl.の後で、Arist.がdialektikeに意味の変更をもたらしたので、それ以後、dialektike(dialectic, dialectique, Dialektik, dialettica)という語には、様々な意味がこめられて、収集がつかなくなっている、と言ってもよい。

3445

dialektike (問答法) 弁証法
辯證法
| 辯×
ことばをわける

3450

dialektikeは、もとは、法廷弁論としてのrhetorikeとの対立概念

3455

(6)プシューケー(魂)論

psyche(いのち、たましい、こころ)

- ・真の認識はアイデアを知ることである
- ・想起
- ・dialektike(「善」のアイデアを知るための方法)

3460

(i) 純粋性と不死

「知る」はたらきの主体となるもの=psyche

3465

知についての考察は、知る主体であるpsycheについての考察から切り離すことは

できない。

善のアイデアを知るために、肉体の眼だけでなく、体全体を向け変えねばならないのと同様に、psyche全体を、現象の世界から、実在の世界へと向け変えなければならない。

3470 このpsycheの向け変えは、Pl.の教育の根本理念である。教育とは、視力をもっていない者にそれを植え付けるのではなくて、もっている視力の向きを変えるものである。

・真の認識 → アイデア論へ発展させる、と共に、

3475 ・psycheについても、Soc.の教えを基本としつつ、その上にPl.の考えを発展させた。

もともと、真の知の対象となるべきアイデアは、noeton（思惟されるもの）である。それは、純粋な思惟によってのみ捉えられる。我々が、純粋なpsycheそのものにならないなければならない、という実践的要請を含んでいる。

3480 この要請は、おそらくは、ピュタゴラス的思想の影響下にあると言ってよいが、それが、肉体とpsycheとの対立の形で打ち出されたのは、*Phaedo* においてである。（心身の対立、霊肉の対立）

3485

生成・消滅する感覚の対象	区別
常に変わることはない思惟の対象としてのアイデア	

この区別と対応しながら、psycheとsoma（肉体・物体）が区別される。

3490

psycheは肉眼に見えない対象と親近性をもつ。	区別
somaは、感覚的对象と親近性をもつ、とされる。	

cf. *Phaedo*, 64A-69E, 78C-84B

3495 まさしく、この対応のために、認識のための、精神(psyche)の純化、psycheのsomaからの純化が、ひとつの要請として、強く打ち出される(*Phaedo*)。

3500 即ち、我々のpsycheがアイデア的な真の実在を見たり、知ったりすることを妨げるものは何か？ それは、我々のsomaに由来する様々な非合理的欲望とか感情とか感覚とかいったものである。

我々のsomaを通じて、ものごとを考察するときは、経験が示すように、我々のpsycheは、生成・消滅するものの方へ引きずられてゆき、眩惑される。従って、そのようなsomaからの影響をきっぱり退けて、純粋に自己自身となったpsycheのみが、よく真実在をそのもっとも明晰な姿のままに見定めることができるであろう。

3505 無論、このことは、現実生きてsomaと共にある人間にとっては、完全な実現は不可能であり、ひとつの要請にとどまらなければならない。→人間存在の現実に対する痛切な嘆きが基調になっている(*Phaedo*)。

3510 しかしながら、もしも、真の知の対象がアイデア的存在でなければならず、そのアイデア的存在は純粋なpsycheによってしか、捉えられないものであるとするならば、その要請は、知をもとめるphilosophos（知を愛する者・哲学者）にとっては、実現

可能かどうかかわからないが、しかし、避けることのできない要請である。

3515 そこで、philosophosは、生涯をかけて、psycheをできるだけsomaから引き離し、
できるだけpsycheをそれ自身に結集させるように努めなければならない。従って、
もし、通常の言い方に従って、「psycheがsomaから離れる」ということが「死
(thanatos)」であるならば、philosophosの生涯の仕事は、まさに「死の練習
(melete thanatou)」に他ならない(Phaedo 81A; cf.67E)。

3520 この「死の練習」ということは、somaに由来するものによる「にがり」を除くこ
とを、比喩的に言っているだけでなく、文字通り、死を覚悟して、その死から（与
えられた）生をみる、という、厳しい要求があることが認められる。

Phaedo 80D-81A

3525 「本当の意味で知を愛し求めてきたpsyche、心安んじて文字通り死を完成すること
を練習してきたpsycheは、psycheがsomaを去った後、自分と似た、神的で不死で
叡知的なもののほうへとpsycheは去っていく。そして、一度（ひとたび）、そこへ
行き着いた後は、psycheは、さまよい・無知・恐怖・欲望から解放されて、幸福と
いうことは、そのときこそ、我がものとなるのではないか」

3530 アイデア：我々がそれへと向かって努力するという点において、あくまでrealな存在
であり、かなわざるまでも、その努力において人間にゆるされる神性・不死性がある。
人間は、自らのpsycheのもっている神的な可能性を信じなければならない。

3535 Phaedo全体のテーマは、「魂(psyche)の不死」の論証にある。しかし、その
psycheの不死ということ(105Dで完成する)、その論証によってよりはむしろ、
このSoc.の死の直前という、特殊な重みをもつ時間における対話そのものからにじ
みでているもの、Pl.によって、可能な限り、追体験されているSoc.の一種、不気味
なほどの「死への覚悟」によってこそ、我々に対して訴えてくる、と言えるのでは
3540 ないか。

Soc. --- 「何よりもpsycheを大切にせよ」この世において、真に情熱をかたむけ
るに値する唯一のものをpsycheの中に見い出して、それに生涯をかけた人。その人
の死への覚悟がPl.に、そして我々に訴えかける。

3545 認識への知的努力に徹したpsycheは、通常の意味における生と死との対立の外に
立つ。psycheの不死ということ、そういう希有の場所に自己の本来的な生の拠点
をおくことに慣れることから生まれる、ひとつの自覚ではないか。

3550 (ii) 3区分説

以上のPhaedoにあらわれるpsycheとsomaの葛藤は、その後、Politeia IV, IXにお
いて、psycheの3区分説へと移行していく。

- 3555 1) 知的部分 to logistikon
2) 気概的部分 to thumoeides
3) 欲望的部分 to epithumetikon

Phaedrにおける霊肉の対立が, psycheそのものの内に, 持ち込まれて, 3つの部分の対立として扱われる。

3560

Politeia, IV, 434D-441C, IX, 580D-581C, 3部分に特有の欲望をもつことを述べる。

3565

- 1) 知を愛する。学ぶことを愛する。
- 2) 勝つこと, 名誉を愛する。
- 3) (肉体的欲望) 金銭を愛する。

3570

Phaedricな考えを基本的には受け継いでいるが, この3区分説のひとつの意義は, 知性のはたらきを, 感性のはたらきから区別することにある(感性の混濁から知性を区別する)。また, 2)の部分は, その知性のはたらきを側面から助ける部分として, 愛憎・好嫌にかかわる, この点に着目されている。

3575

ある人においては, 知性そのものが, あるものを, よいもの, とみても, 感情的なものに支えられないと, 知性は空転するおそれがある。従ってその際, 2)の部分は, 1)を助ける, という役割をもつ。

このことは, ムーシケー(*mousike*)を通じての感情教育を重視する面につながっていく。Pl.の考えでは, 幼少のころは, 感情教育に重きを置く。

この考えが, *Phaedrus*での「二頭立ての馬車」の比喩に効果をもつ(エロスについて)。(Phaedrus, 253CDE~)

3580

┌—良い馬
取者—┤
└—悪い馬

3585

3つの部分を取する(制する, コントロールする)バランス感覚に, *Politeia*の力点がある。

また, 例えば, *Timaeus* (全体がmythos)では, 宇宙生成の人間の創造のところで, psycheの3区分に言及する。

3590

- 1) 「知的部分 to *logistikon*」という名称は現れない——(上部) 頭部
- 2) 「気概的部分 to *thumoeides*」という名称は現れない——胸部
- 3) 「欲望的部分 to *epithumetikon*」という名称は現れない——下肢部

3595

Freudによると, 最も基本的な部分は3)であるが, しかし, Pl.によれば, 最も自然本来的なのは, 1)であって, それ以下は, いわば, 墮落して派生してできたものである。

(iii) <動>の原理——宇宙のpsyche (*Weltseele*)

3600

*Phaedrus*のmythosで, それまでになかった新しい観点が, psycheについて述べられる。それは,

psycheが「自分で自分を動かすもの, 自己自身によって動かされるもの」

3605 と定義される。これを広く、宇宙全体の万有の「動」と連絡をつけるという観点である。このことは、Pl.後期思想の特色となっている。Timaeusでも前提されており、さらにLeges Xで、はっきりと表明されている。

「この意味でのpsycheこそ、あらゆるものの動きの原因である」

3610 → 一体、宇宙においては、物質的なものが先なのか、精神的なものが第一次的なものなのか？ という問いに答えるものである。

この考え方は、ギリシア哲学の宇宙論的概念としてのpsycheの考え方を受け継いでいる。

3615 万有の原理 (arche, アルケー, もとのもの) は、「水」・・・Thales
「無限 to apeiron」・・・Anaximandros
「空気」・・・Anaximenes

物質的な相 (原子論) と、精神的な相とが分化されていない ↓
これらはpsycheに他ならない。

3620 Democritusは、物質的な相を徹底したが、Pl.はこれに対して、物質的な相を流転するものとして、徹底してみて、根元的なものは、むしろイデアであるとした。アトム (原子, アトモンatomon) は、数学的な数に還元できるのであって、アトムはそれからの派生である。この世界 (その外はイデア界?) において、なお、第一次的なものは、psycheである。これが物質的なアトムをも成立させる。psycheは自ら動かす、物質的なものをふりきった、第一時的なものであり、物質的なものは第二次的なものである。

3630 人間一人一人の個人のpsycheは、その本来の素性において、宇宙のpsycheにつながっている。宇宙のpsycheの動きに同化することが、個人のpsycheにとっての、そのpsycheを大切にすることになる。

以上は、宇宙・自然全体にかかわる視点と、個人のpsycheについての視点を含んでいる。

[C] 論理的・認識論的反省と全体的世界像の確立

3635 → 後期思想の展開 (Parmenides以降)

イデア論の思想が、Parm.において、ひとつの転機にさしかかる。(Parm.の前半において) イデア論に対する一種の批判 (自己批判) が行なわれる。

3640 登場人物

Parmenides・・・・・・集中的に質問 (6つ) する。

Zenon

↓

若いSocrates(20歳以前)・・・・イデア論を述べる。

3645 若きSoc.は、この質問に対して十分に答えられない。

後期対話篇における変化 (内容的には、Parm.以降)

1.[Parm.を除き], Soc.が主役から後退する (Parm.の主役は、Parmenides) .

3650 *Theat., Philebus*

2. *Symp., Phaed., Politeia (Resp.), Phaedr.* に見られたイデア論の積極的な展開が見られなくなる。ただし、*Timaeus* は例外である。

3655	<i>Symp.</i>	ethikos	↓	イデア論の全面的展開
	<i>Phaed.</i>	ethikos	↓	
	<i>Politeia (Resp.)</i>	politikos	↓	
	<i>Phaedr.</i>	ethikos	↓	

3660	<i>Parm.</i>	logikos	・ ・ ・	古代の呼称にlogikos, peirastikosが現われる。
	<i>Theaet.</i>	peirastikos		
	<i>Soph.</i>	logikos		
	<i>Politikos</i>	logikos		
	<i>Philebus</i>	ethikos		
3665	<i>Timaeus</i>	physikos		

・ *Parm.*におけるイデア論批判と、この変化をどう見るか？

3670 ーPl.は、*Parm.*を転機として、それまでのイデア論を放棄した。あるいは、全面的に放棄しないまでも、重大な修正を行なった。（「放棄した」といういわば「放棄説」をとったのが、J. Burnet, A.E. Taylor. この人たちの見解は今ではすでに捨て去られている。「修正した」という「修正説」をとるのが、H. Jacksonで、彼は、Cambridgeにおける、Adamの先生）

3675 ー分析哲学の流れを汲む人々の解釈（Russell, Moore, Wittgensteinの影響を受けたPl.研究者の解釈）

Pl.研究の中に、この流れが入る。G. Ryle (Oxford)が、1939年に'Mind'誌に、"Parmenides"という長大な論文を書いた。自分たちの行なっていることを「哲学の革命」と呼ぶ。Pl.の後期における業績を、自分たち（＝分析哲学を奉じる）の先駆とみなす。Russellのpropositional function に対応する。特に、Wittgensteinの *Tractatus Logico-Philosophicus* と親近性をもっている。後期のPl.の見解のためには、イデア論を悔い改めることが必要であった、とする。*Parmenides* 以降のPl.は、悪しき形而上学を捨てて、日常言語の分析に方向を変えたとみる。この点が分析派の先駆として評価される。（以上、G. Ryle）

3685 ところが、この見解では、*Timaeus*の中でのイデア論が邪魔になるので、G.E.L. Owenは、"The place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues" (*Classical Quarterly*, 1953.) という論文で、*Timaeus*は、実は、*Parmenides*以前に書かれた、と主張した。

3690 このOwenに反対したのが、H. Cherniss ("The Relation of the "*Timaeus*" to Plato's Later Dialogues)である。

3695 イデア論は、Pl.にとって、倫理的・認識論的・価値論的な様々な領域を同時に捉える principium (原理)であったから、このイデア論をどう捉えるかは、単なる

解釈に留まらない。分析派の人々が、この議論に力を入れたのは、上述の意味での全・哲学の立場（自分の哲学的立場全体）が表されることになるからである。

コメント

3700 *Parmenides* におけるイデア論に対する批判的質問は、Pl.のイデア論そのものに対しては成立しえない、と考えられる。Pl.は意識的に、アカデメイアにおける活発な議論を反映しつつ、自らイデア論を吟味にかけているが、イデア論そのものを退けるには至らず、イデア論そのものの誤りは帰結しない。

老パルメニデスは、若きSoc.が質問に答えられなかった後で、
3705 「Soc.よ、もし人が、以上に挙げられたすべての困難に目を向けて、およそ、このイデアの存在を認めようとせず、イデアが恒常的に同一性を保って存在していることを認めようとしないならば、自分の思考をどこへ向けてよいかすら、わからなくなるだろう。そして、このようにして、*dialektike*の力を全面的に破壊することになるだろう」(*Parmenides*, 135B-C)

3710 と言っている。

この老パルメニデスの言葉からは、イデア論の破壊者というよりも、むしろ、イデア論の支持者であるように思われる。

さらに、老パルメニデスは、

3715 「一体、君は、これから哲学について、どうするつもりなのか？ 以上のことが知られないうちに、君はどのような道へ向かうつもりなのか？ 君は、その予備訓練を行わないうちに、直接イデアへ向かったが、そういう意図は美しいが、君は自分を引き戻さなければならない」

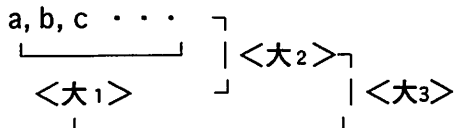
と言っている。これは、Pl.が自分自身に向かって言っているかのようなのである（*Parmenides* 以後の対話篇で、Pl.は、イデア論の基礎がためをする、と言えるだろう）
3720 う）

分析哲学者たちは、何故、*Parmenides*におけるイデア論批判をイデア論を退けるものとみたのか？ 実際に、問題となった質問のひとつを見てみる。

3725 *tritros anthropos* 「第三の人間」論(*The third man argument*)Arist. 以後の呼称。

<大>のイデアが考えられるとは、いくつかのa, b, c . . . というものが<大>であると思われるのに、それらすべてにわたって、そこにひとつの同じイデアがたつことになる。

3730



3735 このとき、<大>のイデアそのものと、大きいものどもをすべてにわたってみると、第三のイデアがたつ。

これらすべて (a, b, c, . . . + <大>) が、それによって<大>であるところのものがあらわれるのではないか？ 同じようにして、いくつもの<大>のイデアがあらわれて、イデアはひとつである、ということにはならない。

3740

イデアはもともと概念ではなくて、文字通り、それによってそれが<大>である

ところの〈大〉である、とすれば、こういう質問がでてくるのは無理もない。分析派の人々は、この議論は、Pl.のイデア論にとって致命的である、とみる。

3745 但し、*Phaedo*, 100Cには、「(もしイデアが) 〈美〉そのものを除いて、何か他のものが美しいとすれば、それは他でもない〈美〉そのものを分有することによって美しいのである」という仕方で、この議論の防止策が考えられている。

3750 *Phaedo*, 100Cによれば、a, b, c, …は、〈大〉というイデアを分有することによって、大きくあるのであって、この〈大〉はいわば、*causa sui* (自己原因)としてあり、a, b, c, …と〈大〉が、さらに、別の〈大₂〉を分有する、とは言えない。

(1) 〈大〉は大である。

(2) a, b, c, …は大である。

3755

(2)は、「大を分有する」と言い換えられる。しかし、(1)は、これ以上には、言い換えられないのに、(2)の仕方で、〈大〉は「大を分有する」と言い換えることがおこりやすい。そのために、「第三の人間」論が生じてくる。

3760 Arist. "～である" → 「述語となる」

\underline{S}	は	\underline{P}	である	=	PがSに述語付けられる。
↓		↓			kategoritai
実体		属性			

3765 G.Vlastos以後、(1)(2)のうち、(2)を基準として判断している者が多い。そうすると、すぐに「第三の人間」論が生じる。

3770

3775

3780

3785